新聞資料アーカイブ

戦争に翻弄された人々

満州からシベリアへ

苦難と絆の記憶

歴史を伝える新聞・証言資料集

資料原本の画像を収録

収録資料一覧

03　帰国列車 逆方向へ

04　苦難と絆 揺れた半世紀

05　語り継ぐ血と涙の記憶

06　今こそ語り継げたい戦争の記憶 ― 戦艦大和（1）

07　今こそ語り継げたい戦争の記憶 ― 戦艦大和（2）

08　昭和21年頃におけるソ連の内蒙古日本人収容所分布概況図

09　睡魔耐え 極限の労働

10　戦況悪化後も宣伝継続

11　戦争の渦に巻き込まれ 満州そしてシベリア

12　戦争の渦に巻き込まれ満州そしてシベリア

13　地元民の人情支えに-奪い合うパン一切れ

14　夢断たれ壮絶な逃避行

15　無念の抑留

16　満蒙開拓体験 老作家

17　「お国のため」誇り高く

18　生か死か 悲劇の旅路

19　①「シベリア抑留」を考える

20　①何が「楽土」だ

21　②「シベリア抑留」を考える

22　40周年記念式典-浜松シオノ体操連盟 功労者を表彰

23　1931年（昭和6年）の満州（中国東北地方）

24　シベリア抑留 死亡者1091人

25　シベリア抑留の2世 輪広げ

26　ダモイ 尾引く心の闇-揺らぐ兵ソ連が洗脳

原本のスキャン状態により、新聞の周辺部が欠けている資料があります。

絶望の凍土

太平洋戦争 最後の証言

〈2〉

“帰国列車”逆方向へ

ホームに滑り込む機関車は、先頭や屋根にまで人がしがみついていた。旧満州（中国東北部）にソ連が侵攻し、南へ逃れる開拓民たち。南満州鉄道はいつ止まるかもしれない。「乗せてー」「押さないでぇ」。生き延びたい執念がぶつかり合う。

死にかけた赤子を背負う母。歩けずに座り込む老人。客車から押し出されるもんぺ姿の女性たち。乗降口の手すりにつかまったまま列車に引きずられていく女性もいた。

一九四五（昭和二十）年八月、満州の昌図で終戦を迎えた四九〇部隊。駅で避難を手助けした名古屋市緑区の一等兵、小崎昇（八七）は、軍に置き去りにされ、真夏の荒野を逃げまどう開拓民たちの姿に言葉を失った。

武器はすべて没収された。関東軍司令官からの命令は「今後はソ連軍の指揮に従うべし」。部隊はあるが、行動の自由はない。

愛知県刈谷市の一等兵、安形光雄（八七）の右足に、八歳くらいの男の子がしがみついた。丸刈り頭に学生服。親と離れてしまったのか。「兵隊さん、帰りたいよう。一緒に連れてって」。涙が安形のズボンにしみ込む。

「兵隊さんもな、ぼくを連れていけないんだ」。安形は小さな体を引き離し、背を向けた。「今の自分は子ども一人守ってやることもできない」。二度と男の子を振り返ることはできなかった。

名古屋市中川区の兵長、中川民義（八九）は、駅近くの路地裏で、日本人女性の悲鳴を聞いた。駆けつけると、ソ連兵が女性を押し倒している。

相手は自動小銃を持っている。中川は「命がけだが、放っておけなかった」。棒をつかみソ連兵の足や背中を殴りつけた。「ウォー」。敵が痛みにもだえる間に「はよ逃げよ」と女性を走らせ、自分も一目散に逃げた。

中川は「何人かは助けてやれた」というが暴行は後を絶たない。女性たちは髪を丸刈りにし、顔に泥を塗ってソ連兵の標的にされるのを避けていた。

兵舎に、監視のソ連兵がやって来る。銃を構えながら、日本兵の胸ポケットから万年筆を抜き取り、腕時計をむしりとる。出征時に父親から形見代わりにもらった時計も奪われた。十個近い腕時計を肘までびっしりとはめて得意顔のソ連兵を、黙ってにらみつけるしかなかった。

九月、昌図の北、四平街に移され「貨車に乗れ」と命じられる。重い足取りの隊員らに、ソ連兵は「ダモイ（帰国）、トウキョウ」とささやく。「帰れるのか」。安形の胸に希望がわいた。

大豆を積んだ貨車に、五十人ずつ押し込められた。

ギギギー、ドスン。

ソ連兵が重い鉄の扉を閉ざし、窓のない車内は真っ暗になった。

列車は途中停車を繰り返しながら北へ。手持ちの食料を食いつなぎ、二カ月かけてソ連国境へ着いた。凍結した黒竜江を徒歩で渡り、シベリア鉄道に乗り換える。ウラジオストク経由で帰れるのだろうと、安形はまだ信じていた。

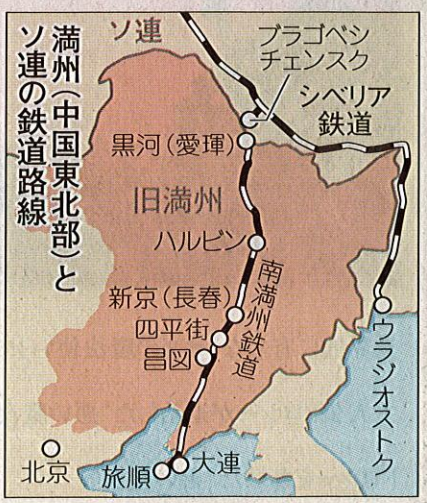
数日後の朝、兵たちが騒ぎだした。扉の隙間からのぞくと、列車は朝日に背を向けて走っている。「おい、この列車、西へ、ソ連へ向かっとるぞ」

希望が、絶望に変わった。

（敬称略）



長春から着の身着のままで避難し、日本にたどり着いた引き揚げ邦人＝1946（昭和21）年7月、京都府舞鶴市で（外務省提供）



満州（中国東北部）とソ連の鉄道路線

旧満州の開拓団　日本政府が1931年の満州事変から45年の終戦まで、中国東北部に送り出した人たちの総称。恐慌で疲弊した農村の余剰人口を吸収する狙いで、20年間に500万人を移住させる計画だった。最終的に27万人が移住。長野県出身者が3万3000人と最多で、山形、熊本、福島と続く。地元住民の土地を強制収用し、農地を開墾した。軍にとっては対ソ連防衛の意味もあり、戦局が悪化すると開拓団の男性は根こそぎ徴兵された。終戦時、満州には開拓民ら155万人の民間人がいたが、食料や交通手段がなく、引き揚げは多難を極めた。中国政府の協力で遼寧省胡蘆島（ころとう）に邦人が集められ、46年5月から120万人が順次帰国した。家族と離れ離れになって残された子どもは中国残留孤児となった。

連載への感想や体験談をお寄せください。

〒460 8511（住所不要）中日新聞社会部「絶望の凍土」取材班・ファクス 052(201)4331・Eメール shakai@chunichi.co.jp

静岡新聞
夕刊
2月10日(火)
〒422-8033
静岡市駿河区登呂3-1-1
静岡新聞社
電話〈054〉282-1111
月決め2,900円 本体2,685円 消費税215円
1部50円（消費税込み）
©静岡新聞社2015
浜松総局 浜松市中区旭町11-1 プレスタワー内 電話〈053〉455-3355
東部総局 沼津市魚町1 サンフロント内 電話〈055〉962-0380

弾かない
ピアノ
再活用させてください

大陸の花嫁 ②

苦難と絆 揺れた半世紀

「父さんお元気ですか。吉林省で結婚し、1男3女の母になっています。早く帰りたい」

1974（昭和49）年の年末、満州で死んだと思われていた竜山（りゅうざん）開拓女塾（じょじゅく）2期生、紅林ことさんから相良町（現・牧之原市）の紅林家に一通の手紙が届き、町は騒然となった。日本は高度経済成長を終え、新幹線は東京―博多間を結ぼうとしていた。

51歳になっていたことさんの帰国を支援した久保みつさん(85)＝同市大江＝は「皆で苦しみを乗り越えてきた時代を、異国で一人生きてきたことさんが、気の毒だった」と振り返る。

■

ことさんは、助けてくれた中国人一家の嫁になった。そうするしか生きる手段がないと思って、諦めの気持ちだった。日本人への風当たりは厳しかった。地域で共有している物がなければことさんのせいにされ、子どもは「日本鬼子」といじめられた。娘が小刀で額を切られたこともある。

救いは夫だった。引っ越しをして子どもを守った。ことさんが嫁の仕事とされた靴作りができなかったため、いつもぼろぼろの靴を履いていた。生活は貧しく、「瀕死（ひんし）の自分によくおかゆを食べさせてくれた」と恩義を感じた。夫がなぜ日本人の自分を妻にしたのか、ふと疑問に思うこともあった。「何もできなかったころから手を上げられたことは一度もなかった。いつもそばで見守ってくれた」。愛情を実感し、家族は「温かい宝物」になった。

■

72年に日中国交が回復した。「手紙を書きなさい」。訪ねてきた公安局の関係者に促され、ことさんは30年ぶりに実家に手紙を書いた。すぐに返事が来て、一時帰国が決まった。出発前夜、夫と子どもたちは「敗戦国が今どうなっているか分からない」「必ず帰ってきて」と念を押した。

相良の海岸から毎日のように見ていた富士山が飛行機の窓から見えると、涙が止まらなかった。

蛇口から水が出て、こんろのつまみをひねると火がつく。ことさんが「浦島太郎の気分だよ」と繰り返したのを、訪ねた多くの人が覚えている。

80歳を超える父から「ここにいなさい」と強く言われ、半年の滞在予定は延長を重ねた。しかし、中国で待つ家族の顔が浮かび、ことさんの心は揺れていた。

1年3カ月後、ことさんは中国に戻った。同窓会などの集まりや生活面の支援を担った久保さんは、別れの朝、泣きそうな顔で手を重ねる2人の写真を大切に持っている。

久保さんは中国の切手を買ってことさんに送り、文通を続けた。「日本でお世話になりました」。50通に上る手紙には毎回、お礼の言葉がびっしりとつづられていた。

■

ことさんは夫の死去後の95年、「日本に一緒に行ってもいいよ」と言ってくれた長男と永住帰国した。一時帰国の時の騒ぎがうそのように、静かな日々だ。「ことちゃん、来たよう」。菓子を手に訪れた久保さんを迎えたことさんは、「みっちゃ、久しぶりじゃん」とほほ笑んだ。静岡弁の中に、中国語の発音や中国式に指折り数えるしぐさも交じり、大陸で過ごした半世紀の重みがにじむ。

「今幸せだよ。耳が遠くなったけどね。褒め言葉だけは聞こえるからいいよ」と目を細める。自室の壁には、夫の大きな写真が掲げられている。あれから70年。「敵国の国民を助けるなんて、日本人にできるかな」。短い言葉で、海の向こうの恩人たちに思いをはせる。



海の向こうに富士山が見える浜辺は、紅林ことさん（右）と久保みつさんにとって故郷の象徴だった＝1月下旬、牧之原市の太田浜海岸



竜山開拓女塾時代の紅林ことさん（右から3人目）



▷8

静岡新聞 夕刊 2月13日(金)

〒422-8033 静岡市駿河区登呂3-1-1
静岡新聞社 電話〈054〉282-1111
月決め2,900円 本体2,685円 消費税215円
1部50円（消費税込み）

©静岡新聞社2015

浜松総局 浜松市中区旭町11-1 プレスタワー内 電話〈053〉455-3355
東部総局 沼津市魚町1 サンフロント内 電話〈055〉962-0380

公益財団法人 SBS静岡 人間ドック 女性健診 特定健診 一般健診

大陸の花嫁 ④完

語り継ぐ 血と涙の記憶

「たとえ一人になっても日本へたどり着き、満州の実情を伝えるんだ」。満州からの逃避行体験「無告の大地」（1996年）の筆者寺田ふさ子さん(87)＝磐田市中泉＝の脳裏には、父政雄さん＝当時(42)＝の遺言が焼き付いている。竜山（りゅうざん）福田開拓団の幹部で、竜山開拓女塾（じょじゅく）指導者だった父の遺志をくみ開拓民の悲劇をつづった。自宅の本棚に並ぶ著書を手に取ると、当時の記憶がよみがえる。

■

44(昭和19)年5月、父に連れられ母、弟、妹と竜山（現中国吉林省鎮賚県）に渡った。現地の国民学校で教員になり充実した日々を送っていたが、45年8月8日、日ソ中立条約が破棄され、ソ連軍が満州に侵攻した。中国人の反日感情も高まっていた。早々と撤退する関東軍と役人たち。孤立した開拓団はポツダム宣言受諾の翌15日、脱出を決めた。

内地に開拓団の苦境を伝えるために生きよう―。この夜、家族はそう誓い合った。

16日早朝。開拓団約400人は中国側の銃弾が耳元をかすめる中、地平に続く広野を必死に走った。

3日目の夜、走り疲れたふさ子さんが線路の枕木に頭を乗せ休息していると、駆け寄ってきた男性に血の付いた拳銃を手渡された。もしものためにと父から使い方を教わっていたもので、「これがお前の手に届いたらお父さんは死んだと思ってくれ」と事前に言い渡されていた。女塾生らを守るため集団の最後尾で防戦していた父は腹部を負傷し、最期は自ら拳銃でこめかみを撃ったという。

心の支えを失ったふさ子さんは声を殺して泣いた。父を追って死のうとも考えたが、出発前の誓いを思い出し前に進むことを選んだ。逃避行は9日間に及んだ。

■

新京（現長春市）の中国側の警察に炊事係として勤めながら1年を過ごし、46年に帰国。父との約束を果たそうと、すぐに壮絶な記憶をちらしの裏に書き留め始めた。団員の家を回り出版の許可を求めた。傷ついた心を逆なでするようで気が引けたこともあったが、「満州で起きたことを誰かが書かないといけない」との団員の声に背中を押された。出版後は県内各地で講演し、現地での日々を語った。

「お父さんとの約束は守れたかな」

天国の父に読んでもらうため、手元の1冊は自分のひつぎに入れてもらうつもりだ。

■

県立小笠高の社会科教諭中山敬司さん(50)は戦争体験を後世に伝えるため、関係者への聞き取りに取り組んでいる。

7年前、ふさ子さんと女塾生にビデオインタビューし、当時勤務していた県立掛川東高での授業で使った。元女子校で、全校生徒の半数以上を女子が占めていた。国のために青春をささげた同年代の女性の身になって戦争を見詰めてもらいたかった。

教室のテレビに流れるふさ子さんらの重い語り口に生徒は静まり返った。平穏な満州での生活に忍び寄る戦争の影と決死の逃避行。授業後の感想には「胸が苦しくなった」「自分だったら女塾に参加しただろうか」と悲痛な思いが並んだ。

戦争体験者は少なくなり聞き取りは年々難しくなっている。「若い世代への記憶の継承は教員が媒介するしかない。受験勉強も大事だが、国策に翻弄（ほんろう）された一般国民の歴史を忘れてはいけない」。言葉に力を込めた。

（こちら女・大須賀伸江、掛川支局・柿田史雄、写真部・浅井貴彦）

〈次回のシリーズは朝刊に掲載します〉



竜山開拓女塾を授業で取り上げた中山敬司教諭。若い世代への戦争体験の継承に力を入れる＝2日、菊川市東横地の県立小笠高

満州開拓団と女塾をめぐる年表

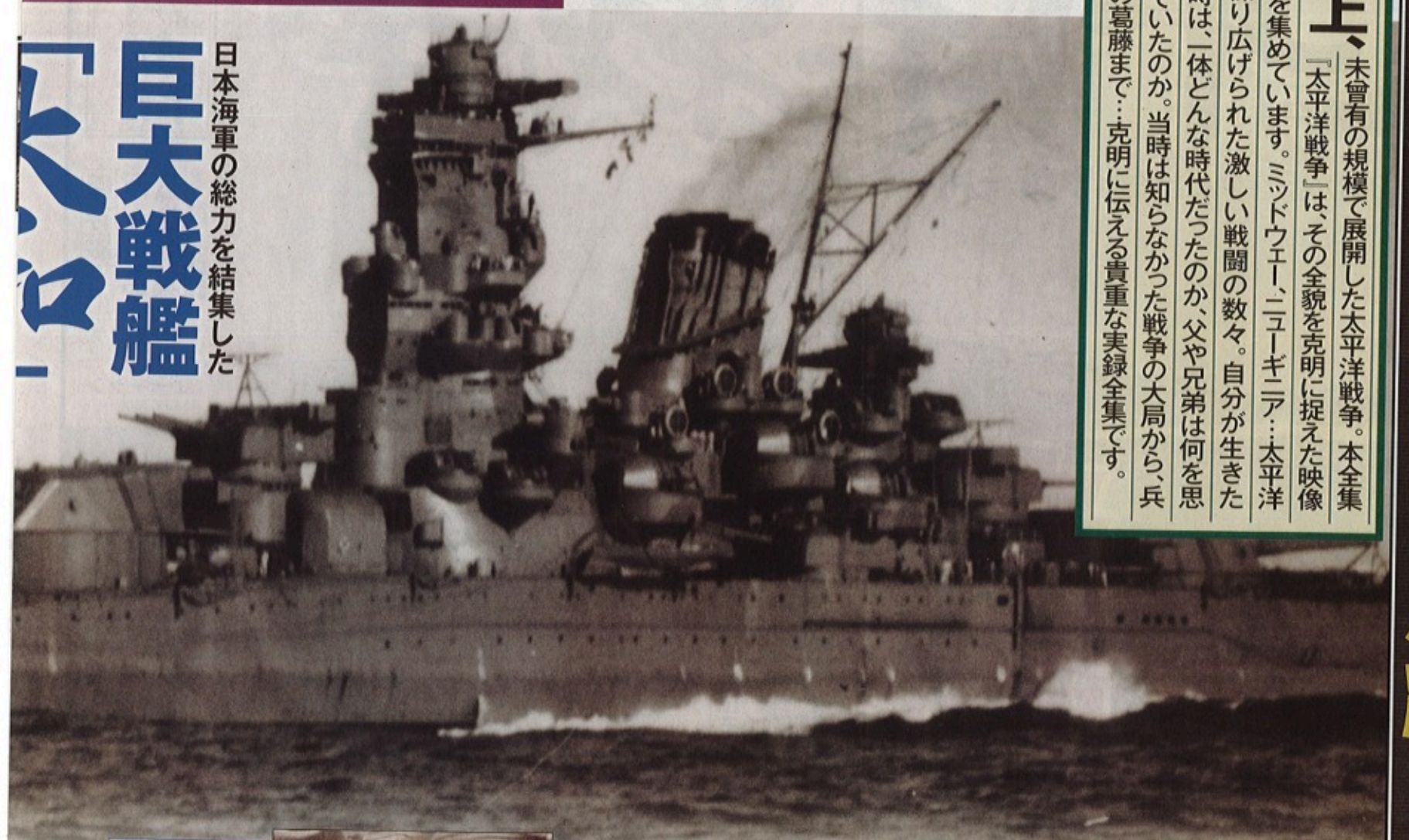
1931年(昭和6年)	満州事変
32年	満州国建国
36年	満州への移民計画が国策に
39年	1カ所目の女塾（山形県送出）が設立
42年	竜山福田開拓団内に竜山開拓女塾が設立
44年	寺田ふさ子さん、女塾3期生と渡満
45年	終戦、逃避行
46年	女塾生の多くが帰国

▷10

今こそ語り継ぎたい戦争の記憶

日本史上、未曾有の規模で展開した太平洋戦争。本全集『太平洋戦争』は、その全貌を克明に捉えた映像集として注目を集めています。ミッドウェー、ニューギニア…太平洋上の島々で繰り広げられた激しい戦闘の数々。自分が生きたあの日、あの時は、一体どんな時代だったのか、父や兄弟は何を思いながら戦っていたのか。当時は知らなかった戦争の大局から、兵士一人ひとりの葛藤まで…克明に伝える貴重な実録全集です。

来た時代がここに！



日本海軍の総力を結集した 巨大戦艦「大和」

昭和十六年十二月八日、日本史上未曾有の戦争が始まった——



▲日本軍の攻撃を受けて炎上する真珠湾停泊中の米戦艦群

真珠湾攻撃 第2巻

海軍の真珠湾攻撃と、陸軍のマレー半島侵攻で幕を開けた、太平洋戦争。「ニイタカヤマノボレ一二〇八」の暗号を受け、日本海軍はハワイ・真珠湾を奇襲する。真珠湾攻撃の成功の知らせに国民の多くが熱狂したが、日本の宣戦布告が遅れたため、アメリカは「卑怯ならまし討ち」攻撃を「卑怯ならまし討ち」ととらえ、アメリカ国民の戦意に火をつける結果となった。一方、陸軍の作戦目標は別の所にあった。



▲二・二六事件以後、日本は軍国主義の道へ突き進みます

運命の海戦、その時連合艦隊を待ち受けていたものとは—!?

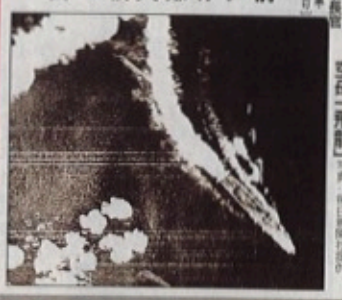
ミッドウェー海戦 第4巻

連合艦隊が立案したミッドウェー攻略作戦。ミッドウェーを叩けば、ハワイのアメリカ太平洋艦隊が動く。それを撃滅して、有利な体勢でアメリカと講和を結ぼうという狙いだった。綿密に計画されたミッドウェー海戦は、完全な奇襲のはずだった。

ところが日本軍は事前に暗号を解読したアメリカの待ち伏せを受ける。攻撃主体の機動部隊は空母をすべて失い、ミッドウェー海戦は日本の完敗に終わった。しかし海軍は、偽りの戦果を発表し…。



山本五十六連合艦隊司令長官（第一航空艦隊司令長官時）



◀米軍の攻撃を回避する空母「飛龍」（写真：朝日新聞社提供）



家族からの手紙を読む兵士

当時、軍事郵便のほとんどが検閲を受けていました。自分の居場所を知らせることは軍事機密に触れるため、兵士たちは様々な工夫を凝らして、家族に伝えようとしました。

兵士たちを見舞った密林の悲劇——

ガダルカナルの戦い 第5巻

平洋・ソロモン諸島のガダルカナル島から始まった。日本陸軍はこれまで、兵器や弾薬、食料など、補給の問題にあまり苦労することなく、戦線を拡大してきた。敵陣地を攻略できれば、敵の食料や物資を入手できるという経験が、日本軍の補給に対する考えを安易なものとしていたのだ。制空権・制海権を奪われた日本軍は補給が途絶え、深刻な食糧不足となる。六千人の戦死者と一万五千人の餓死者を出したのち、ついにある"岬"で将兵たちの撤退作戦が実行されたが…それは…。



▶米軍のジャングルを突き進む兵士たち



▲陸軍戦闘機「隼」は圧倒的強さを誇った

第3巻 国力を超え回り続ける歯車「戦線拡大」 収録時間62分

南方の資源を手に入れ勢いに乗った陸軍はビルマへ進攻。海軍もビルマへの海上輸送路をほぼ手に入れ、日本の領土は国力を超えて広がろうとしていました。

【収録内容】
- ビルマ公路
- 偵察隊
- ビルマ空襲
- モールメン攻略
- ペグー占領
- ラングーン占領
- アンダマン諸島占領
- セイロン島空襲
- 従軍カメラマン
- 飛行場建設
- 加藤「隼」戦闘隊
- エナンジョン油田占領
- 援蒋ルート遮断
- ラバウル航空隊
- カビエン・ラバウル占領
- ラエ・サラモア占領
- ポートモレスビー爆撃
- 「南方占領地行政実施要領」
- 軍票
- 南方の資源図と輸送船……ほか



▲フィリピンから急遽脱出した、マッカーサー米陸軍大将。彼が残した「アイ・シャル・リターン」はあまりに有名。

第2巻 東南アジアで戦果を得るも…「開戦」 収録時間60分

海軍の真珠湾攻撃と、陸軍のマレー半島進攻で太平洋戦争が幕を開けます。日本は破竹の進撃で勢いづく一方、政府も軍部も、占領地域の運営方針を用意していませんでした。

【収録内容】
- 錦江湾での訓練
- 真珠湾攻撃
- 「トラトラトラ」
- 「九軍神」
- マレー沖海戦
- 銀輪部隊
- 工兵隊
- シンガポール入城
- 香港占領
- 落下傘部隊兵士の回想
- パレンバン攻略
- スラバヤ沖海戦
- ジャワ攻略作戦
- バターン攻略作戦
- マッカーサー「アイ・シャル・リターン」
- フィリピン占領
- 「死の行進」……ほか



▲勝利の報に喜ぶ子どもたち



▲松岡外相が国際連盟からの脱退を宣言した

第1巻 なぜ戦争は始まったのか「太平洋戦争への道」 収録時間61分

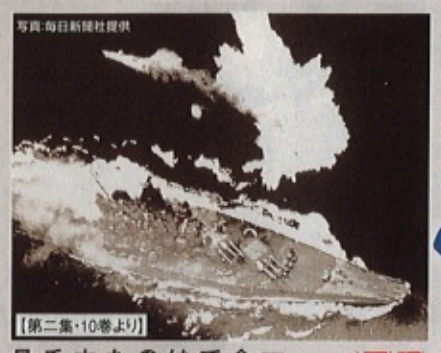
満州事変での関東軍の独断専行に始まり、朝鮮軍の無断越境、その後の国際連盟脱退…そして日中戦争に踏み切り、イギリス・アメリカを本格的に敵に回した日本は、ついに対米開戦を決意します。

【収録内容】
- 満州事変
- 第一次上海事変
- 五・一五事件
- 満州国建国
- 国際連盟脱退
- 二・二六事件
- 盧溝橋事件
- 第二次上海事変
- 大本営設置
- 観艦式
- 南京占領
- 国家総動員法
- 武漢三鎮占領
- ノモンハン事件
- 第一次世界大戦勃発
- 日ソ中立条約
- 独ソ連に侵攻
- 日米の国力比較
- 南部仏印進駐
- 「ニイタカヤマノボレ一二〇八」……ほか

※本広告の写真は、「太平洋戦争・第一集」（第1～5巻）及び「太平洋戦争・第二集」（第6～10巻）より使用。

涙なくしては語れない我らの生

「大和」散る


写真：毎日新聞社提供
【第二集・10巻より】

昭和20年4月7日、不沈と言われた「大和」の壮絶な最期

昭和二十年四月五日、「大和」に沖縄突入の命令がくだる。本来の目的であった艦隊決戦の場ではなく、特攻攻撃としての出撃…。沖縄に向かった十隻の内、「大和」以下六隻が沈没。「大和」三千三百三十二人の乗組員の内、生存者は――。（第二集・10巻より）

昭和6年
9・18 柳条湖事件、**満州事変**始まる

昭和7年
3・1 満州国建国を宣言
5・15 **五・一五事件**

昭和8年
3・27 日本、国際連盟から**脱退**

昭和11年
2・26 **二・二六事件**

昭和12年
7・7 **盧溝橋事件**

昭和13年
4・1 **国家総動員法**公布

昭和14年
5・11 **ノモンハン事件**
9・1 独軍がポーランドに侵攻
第二次世界大戦勃発

昭和15年
9・23 日本軍、北部仏印に武力進駐開始

昭和16年
4・13 日ソ中立条約調印
12・8 **ハワイ真珠湾攻撃**
太平洋戦争始まる

昭和17年
2・15 シンガポールの英軍、日本軍に降伏
6・5 **ミッドウェー海戦**
日本海軍敗北

昭和18年
4・18 山本連合艦隊司令長官、戦死
10・21 神宮外苑競技場にて
出陣学徒壮行会挙行

昭和19年
3・8 インパール作戦を発動
10・25 **神風特別攻撃隊**
レイテ沖に出撃

昭和20年
2・19 米軍、硫黄島に上陸
3・10 B29による**東京大空襲**
4・1 米軍、沖縄本島に上陸
8・6・9 広島、長崎に原子爆弾投下
8・15 **玉音放送**
太平洋戦争終わる

※本年表の昭和18年以降の本編映像は「太平洋戦争 第二集」にてご観いただけます。

写真：呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）



作戦の詳細、進攻ルート、最前線の戦地の映像から当時を生きた兵士たちの素顔まで…

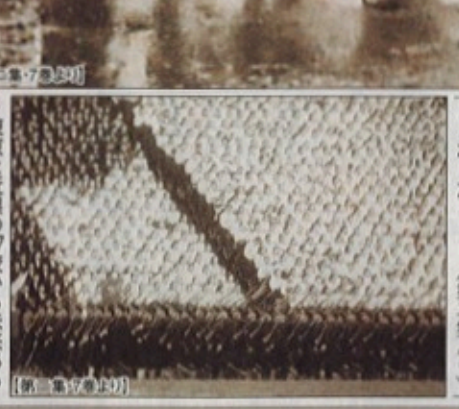
巨大な戦争の全貌を映像で振り返ります


【第二集・7巻より】

学業半ばに、愛する家族を残して…

出陣学徒壮行会

昭和十八年十月二十一日、雨が降りしきる中、神宮外苑競技場で挙行された学徒壮行会。**大学生や専門学校生を対象とした、戦時体制強化の一環だった。**雨の神宮外苑に集結した若者たちは、学業も夢も志半ばに、短期間の訓練を終え、ただちに最前線へ送られることとなった…。（第二集より）


【第二集・7巻より】

▶東京と近県の77校から未来ある学生たちが集結しました。


【第二集・9巻より】

▲特攻は、日本軍が戦果をあげられる唯一の作戦となった。

特攻隊
第二集に収録

祖国よ、さらば…
悲しくも散った若き命

戦局を挽回すべく組織された特攻隊。昭和十九年十月二十五日、海軍がフィリピンで編成した「神風特攻隊」を皮切りに、その後多くの若者たちが飛び立って行った。

1トン以上の爆薬を積んだ人間魚雷「回天」は、敵艦に当たれば確実に撃沈させることが出来ると考えられていた。**出撃した隊員の平均年齢は二十一歳。中には予科練を出たばかりの十七歳の少年も含まれていた。**隊員たちの遺書に記された、その想いとは――。（第二集より）


【第二集・9巻より】

◀海軍の特攻兵器・人間魚雷「回天」

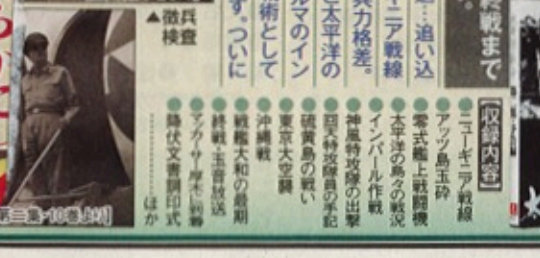

【第二集・9巻より】

▲徴兵検査

付録DVD 太平洋戦争『第二集・予告編』

次第に戦局が厳しくなる日本軍。防戦一方となった各戦地での戦いから終戦までの**第二集・抜粋映像を集めた一巻**です。

ミッドウェー海戦の敗北、ガダルカナルの撤退…追い込まれていく日本。次第に制空権を失い、ニューギニア戦線でも多くの犠牲者を出します。広がる日米の兵力格差。アメリカはマキン・タラワ両島、トラック諸島…と太平洋の島々を次々に攻略していきます。日本軍はビルマのインパール作戦もサイパン防衛も失敗。残された戦術として「特攻」で若い命が次々と戦場に消えていきます。ついに庶民も戦争に巻き込まれていく戦争末期。硫黄島の戦い、東京大空襲、沖縄戦、広島・長崎への原爆投下…そして終戦。玉音放送のもと、日本人が知らなかった事実が次々と明らかに。



収録時間 12分

【収録内容】
- ニューギニア戦線
- アッツ島玉砕
- 零式艦上戦闘機
- 太平洋の島々の戦況
- インパール作戦
- 硫黄島の戦い
- 神風特攻隊の出撃
- 東京大空襲
- 回天特攻隊員の手記
- 沖縄戦
- 戦艦大和の最期
- 終戦・玉音放送
- マッカーサー厚木に到着
- 降伏文書調印式
- ……ほか



第5巻 最後まで出なかった「撤退」の言葉
「ガダルカナル」

ソロモン諸島の要衝ガダルカナル。アメリカ軍に奪取された航空基地の奪回作戦は失敗。制空権・制海権は完全に掌握され、補給作戦も失敗。食料事情は逼迫し、餓死の悲劇が相次ぎます。

▲ガダルカナルに残る重火器も…

【収録内容】
- 米軍ガダルカナル島上陸
- ツラギ守備隊全滅
- 「鉄底海峡」
- 第一次ソロモン海戦
- 米軍海兵隊と日本海軍陸戦隊
- タイボ岬
- ヘンダーソン飛行場
- 「木下隊全滅」
- 第二次ソロモン海戦
- 「鼠輸送」
- 「ムカデ高地」
- 川口支隊敗退
- 飢えとマラリア
- タサファロング
- サボ島沖夜戦
- 「丸山道」
- 南太平洋海戦
- 第三次ソロモン海戦
- 輸送船「鬼怒川丸」
- 「ドラム缶輸送」
- ガダルカナル撤収作戦
- エスペランス岬
- ……ほか

収録時間 63分



第4巻 敗北、そして果てなき防衛戦へ
「ミッドウェー海戦」

米豪遮断を狙う作戦の一環として、山本五十六司令長官が強硬に主張したミッドウェー作戦。日本海軍は主力の四空母を失い敗北、以後太平洋戦線で後手に回るようになります。

▲各部隊の動きは地図で確認できる

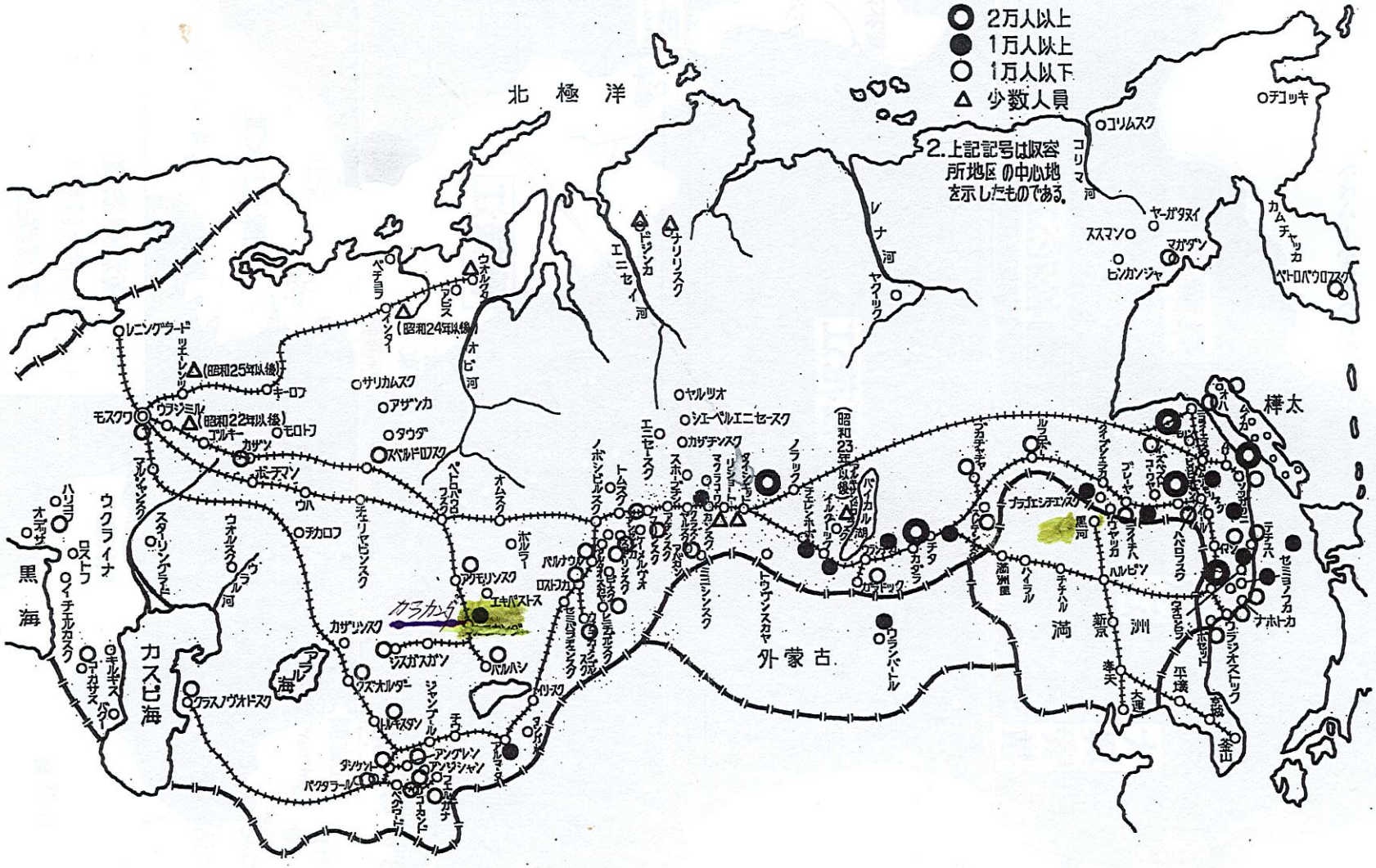
▲決戦の地、ミッドウェーへ出撃する連合艦隊

【収録内容】
- 南洋諸島の日本兵
- 兵士の日記・手紙
- ミッドウェー攻略作戦決定
- 日本本土初空襲
- ツラギ上陸
- 空母「祥鳳」
- 機動海軍戦
- 空母「翔鶴」「瑞鶴」
- ミッドウェー海戦
- 空母「赤城」「加賀」「飛龍」「蒼龍」
- アッツ・キスカ両島占領
- ……ほか

収録時間 57分


食事の時間（日常風景）

昭和21年頃におけるソ連・外蒙領内日本人収容所分布概見図



絶望の凍土

太平洋戦争 最後の証言

〈3〉

睡魔耐え 極限の労働

氷点下四〇度の雪山。点在する収容所に、オオカミの遠ぼえがこだまする。地元民も立ち入らない暗い森を、凍りついた風の音が通り過ぎる。

「ダワイ ビストレ（早くやれ）」。ソ連兵が機関銃を突きつける。愛知県愛西市の一等兵、横井清正（八五）＝＝は、仲間と二人一組で両端に柄の付いたのこぎりを押し引きし、松の幹を刻んでいた。

頬に当たる風は、針のように痛い。息でまつげが凍り、目が開けられない。「眠るなよ。死ぬぞ」。声を掛け合い、もうろうとする意識を呼び覚ます。

掛川市の一等兵、堀内憲司（八七）＝＝は、のこぎりを持つ指先にピリッと痛みを感じた。指がバイカル湖に近いウランウデ郊外で止まった。

一九四五（昭和二十）年十二月、四九〇部隊を乗せた列車は、ろうそくのように真っ白になっている。凍傷だ。

伐採する松は、大人二人で抱えきれないほどの巨木。一本を切るのに中腰のまま三時間も作業を続ける。

食事は毎食一切れのパンだけ。「一日に松をトラック十杯分」などとノルマを課され、達成できなければパンを減らされる。栄養失調と寒さで、作業中の兵士が突然倒れて息絶える。倒れてくる巨木の下敷きになって死ぬ者もいる。

ほっておけば肉が黒く腐って崩れ、骨が露出する。両手足を切り落とした兵もいた。堀内は懸命に両手をこすりあわせた。

「わしらは家畜同然やった」と、横井は言う。収容所に着くと全員が裸にされた。ロシア人医師が尻の肉をつまんで体格や健康状態を判定し、どの作業に回すかを決める。

収容所は、朽ちた板を張り合わせたあばら家。「豚小屋よりひでえな」。大きな穴に板を渡した便所で、仲間と並んで用を足す。大便はすぐに凍り、小高い塔になる。危険なので棒でたたき壊すと、便が服に跳ねた。

線路の敷設作業で鉄のレールに素手で触れ、皮膚がめくれた。炭鉱では落盤の恐怖におびえながらダイナマイトを仕掛け、缶詰工場では牛やヤギの内臓をとり皮をはいだ。

「ここじゃ死ねなむしるが、疲れ切った体はそれでも眠りを求い。とにかく生きて帰ろう」。静岡市清水区の二等兵、鈴木修治（八六）は夜になると、日本で待つ家族を思っては泣いた。

妻のみわ（八四）は当時、静岡で長男を出産したばかり。父の顔を知らぬ幼子を抱き、ミカン畑を走る東海道線の機関車を眺めては語りかけた。「お父ちゃんはあの汽車ぽっぽに乗って帰って来るよ」

鈴木が目を閉じると、全身を南京虫とシラミがはい回る。服の縫い目には二ミリほどのシラミがびっしり張り付いている。体をかきめた。

ある夜。ソ連兵の怒鳴り声に続き、とどろく機関銃の発射音を聞いた。夜間作業に出る兵が、「制止命令を聞かなかった」と監視兵に射殺された。ロシア語が分からないことだけが原因だった。

「ソ連に負けたわけじゃない。なんでこんな目にあわなきゃいけないのか」。鈴木の心から、夢に浮かぶ妻子の姿が遠ざかっていく。

（敬称略）



伐採した木材を運ぶ抑留者たち。冬場の木材伐採は最も過酷な作業だった＝旧ソ連ハバロフスク地方で



戦争捕虜の扱い　捕虜になった軍人は、捕虜の過重労働禁止や人道的な扱いを規定した戦時国際法「ハーグ陸戦条約」と、それを補足する国際人道法「ジュネーブ条約」に従って処遇される。しかし、当時のソ連はどちらも批准しておらず、これらの条約を無視して国内の再建に日本人抑留者を利用したとみられる。一方、日本はハーグ陸戦条約を批准していたが、ジュネーブ条約の「捕虜の待遇についての条約」には加わっていなかった。戦勝国が日本の戦争犯罪人を裁いた東京裁判では、日本軍が捕虜や住民の虐待防止措置をとらなかったことを有罪と認定した。

連載への感想や体験談をお寄せください。

〒460 8511　（住所不要）中日新聞社会部「絶望の凍土」取材班

・ファクス　052(201)4331・Eメール　shakai@chunichi.co.jp

静岡新聞 夕刊
2月12日(木)
〒422-8033 静岡市駿河区登呂3-1-1
静岡新聞社
電話〈054〉282-1111
月決め2,900円 本体2,685円 消費税215円
1部50円（消費税込み）
©静岡新聞社2015
浜松総局 浜松市中区旭町11-1 プレスタワー内 電話〈053〉455-3355
東部総局 沼津市魚町1 サンフロント内 電話〈055〉962-0380

国指定重要文化財 天竜川龍神化身
「厄除子安地蔵尊」
別格本山 岩水寺
開運厄除星
特別大護摩
遠鉄「岩水寺」
厄除子安地

大陸の花嫁 ③

戦況悪化後も宣伝継続

「広野に愛の柱を立てよ」と記された手書きのポスターがある。1939（昭和14）年ごろ三島高等女学校3年生が描いた、満州の開拓移民に嫁ぐ「大陸の花嫁」を募るポスターだ。美名をうたった標語の書き手も、花嫁たちがたどるその後の運命など知る由もなかった。

■

満州国で日本人の定住家族をいかに増やすかは、国の基盤に直結する課題だった。広田弘毅内閣は36年、20年間で500万人を満州に入植させる移民推進計画を国策とし、入植した男性に嫁ぐ花嫁を送り出そうと動き出した。

16カ所の開拓団内に女塾（じょじゅく）が設けられ、本県は竜山（りゅうざん）福田開拓団内に「竜山開拓女塾」が設けられた。4期にわたって県中西部を中心に20歳前後の124人が渡り、半年の勤労奉仕に励んだ。主に期間を延長してとどまった人には見合い話があり、このうち約30人が現地の団員と結婚したとする資料もある。

元塾生たちに話を聞くと、各種資料が示すほど「花嫁になる」との意識は感じられず、国策とは温度差がある。特に3期生が渡った44年（同19年）ごろは戦況の悪化に伴い開拓団員の召集が進み、見合いどころではなくなっていった背景もある。実際、塾生たちは男性に代わる貴重な労働力になっていた。

半年間の塾生生活を送った3期生渡辺百枝さん（86）＝松崎町岩科、当時（16）＝は「出兵のつもりで満州に渡り、がむしゃらに働いた」と振り返る。午前4時に起床。草刈りや畑仕事に精を出し、真っ赤な太陽が地平線に沈むころ、歌を歌いながら宿舎に戻る―女塾生たちはそんな日々を続けていた。

■

戦況が悪化しても女塾生の募集は続き、終戦間際に渡った4期生は敗戦直後の混乱に巻き込まれた。沼津市出身の川崎かね子さん＝故人、当時（25）＝は決死の逃避行を経て46年に帰国。その後は菊川市などで暮らした。複数の手記に女塾での体験談を残している。

終戦1週間前のソ連の宣戦布告を受け、竜山を出た。中国人の襲撃から逃れるために、坊主頭にし、男性用の団服に身を包んだ。いつでも戦えるよう、自決できるよう―。銃を持ち、草原を走り続けた。後年、手記で「食べ物もなく栄養失調で亡くなる人もいた。よく生きて帰れた」と回顧している。

■

女塾生124人のうち、引き揚げ途中に倒れるなどして、現地で13人が命を落とした。数人は行方不明のままだ。帰国の機を逃し、残留婦人として、72年の日中国交回復を経るまで暮らし続けた塾生もいた。

帰国した彼女らは全国各地に散らばり、それぞれの人生を歩んだ。2005年まで20回以上、毎年親睦会を開いて旧交を温めた。「あの時」見た真っ赤な夕日、かれんな花、草原の匂い、開拓団の生き生きとした人々のやりとり、そして銃弾が飛び交う中を走り続けた内地への帰路。特別な場所で運命を共にした者同士にしか分からない、鎮魂の会だった。


満州国で農作業に精を出す竜山開拓女塾の塾生。土地は肥沃（ひよく）で作物がよく実ったという



三島高等女学校の生徒が描いた「大陸の花嫁」募集のポスター（沼津市明治史料館所蔵）

わだち 轍

▷9

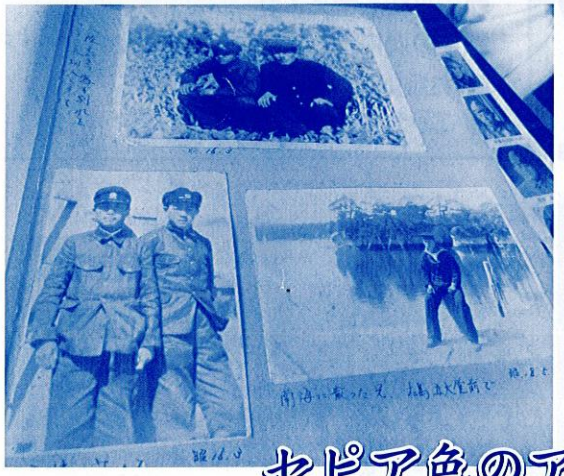
あさがおだより８月企画――語り継ごう――

平和を考える夏

―― 南区楊子町の高井さんにお話伺いました。

参考書物／第４次満州開拓青少年義勇隊 静岡鈴木中隊『北満の青春』

戦争の渦に巻き込まれ 満州 そしてシベリア

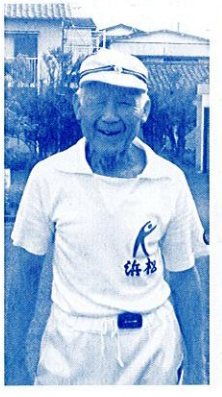






セピア色のアルバムの中の少年は凛々しく…

朝６時半、三島楊子公園に多くの人が集まり、ラジオ体操が始まります。みんなの前で体操を指揮するのは、ラジオ体操歴36年の大ベテラン指導員、高井寅二さん（89才）。明るい笑顔でみんなに慕われています。



大正15年に浜名郡和田村（東区和田町）で六人兄妹の三男として誕生した高井寅二さんは、昭和16年春、高等小学校を卒業した14才（現在の中学二年生）の時、先生の勧めもあり友人と二人で『第４次満州開拓青少年義勇隊』に志願しました。

全国から集まった青少年たちは、茨城県にある内原訓練所で三カ月間の訓練を受けたそうです。起床ラッパで一日が始まり、学科・農事・教練など知識と体力の訓練を受け、消灯ラッパで床に付く集団生活です。

寅二さんは静岡県出身者で編成された『静岡鈴木中隊（２２３名）』の第５小隊に所属。この小隊は、浜名郡（浜松市）出身者58名（23名死亡）でした。

内地の訓練を終了し７月、福井県の敦賀港から満州へ渡りました。

９月、黒河大額特別訓練所へ。ここは、一山越えるとソ連との国境がある所でした。畑を耕し作物を作り、豚や牛を飼い、馬の世話をし、また訓練所周辺の警備にもあたりました。

満州の冬は早く、10月には雨まじりの雪が降りだし、零下30度にもなる厳寒環境で、綿入りの防寒服も通し刺すような寒さだったそうです。

昭和20年８月８日、ソ連が宣戦布告。８月15日終戦。寅二さん19才。仲間たちと捕虜になりシベリアへ抑留されました。収容所に入れられ、炭鉱での重労働を強要され、零下35度の厳寒と栄養失調で多くの仲間を失い…「これが一番辛かった」と話します。

昭和22年、復員。ナホトカから舞鶴港へ日本の地に。

「父は、14で志願した私が復員するまで毎日、氏神様に無事を願ってくれていたと聞き、ありがたい…」と声を詰まらせます。

戦後70年の今。寅二さんは、「健康第一。若くして亡くなった仲間たちの分も、元気に長生きしなくちゃね」とにっこり。今月は金沢で開催の『一千万人ラジオ体操・みんなの体操祭』に指導員仲間たちと参加しました。「平和に感謝だね」と…



ラジオ体操指導員仲間の土屋さんと寅二さん（左）三島楊子公園にて ７月

満州開拓青少年義勇隊は、満 15 ～ 19 才の青少年が全国から毎年１万人ずつ集められ、終戦までの８年間に、約８万６千人が満州に渡り、うち２万４千人が若い命を落としたとされています。

二の日から早や十年九ヶ月の理任頑張っています

あさがおだより８月企画 ―― 語り継ごう ――

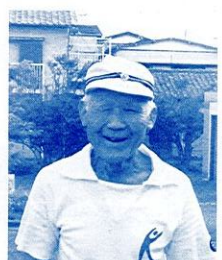
平和を考える夏

―― 南区楊子町の高井さんにお話伺いました。

参考書物／第４次満州開拓青少年義勇隊 静岡鈴木中隊『北満の青春』

戦争の渦に巻き込まれ 満州 そしてシベリア

朝６時半、三島楊子公園に多くの人が集まり、ラジオ体操が始まります。みんなの前で体操を指揮するのは、ラジオ体操歴36年の大ベテラン指導員、高井寅二さん（89才）。明るい笑顔でみんなに慕われています。









セピア色のアルバムの中の少年は凛々しく…

大正15年に浜名郡和田村（東区和田町）で六人兄妹の三男として誕生した高井寅二さんは、昭和16年春、高等小学校を卒業した14才（現在の中学二年生）の時、先生の勧めもあり友人と二人で『第４次満州開拓青少年義勇隊』に志願しました。

全国から集まった青少年たちは、茨城県にある内原訓練所で三カ月間の訓練を受けたそうです。起床ラッパで一日が始まり、学科・農事・教練など知識と体力の訓練を受け、消灯ラッパで床に付く集団生活です。

寅二さんは静岡県出身者で編成された『静岡鈴木中隊（２２３名）』の第５小隊に所属。この小隊は、浜名郡（浜松市）出身者58名（23名死亡）でした。

内地の訓練を終了し７月、福井県の敦賀港から満州へ渡りました。

９月、黒河大額特別訓練所へ。ここは、一山越えるとソ連との国境がある所でした。畑を耕し作物を作り、豚や牛を飼い、馬の世話をし、また訓練所周辺の警備にもあたりました。

満州の冬は早く、10月には雨まじりの雪が降りだし、零下30度にもなる厳寒環境で、綿入りの防寒服も通し刺すような寒さだったそうです。

昭和20年８月８日、ソ連が宣戦布告。８月15日終戦。寅二さん19才。仲間たちと捕虜になりシベリアへ抑留されました。収容所に入れられ、炭鉱での重労働を強要され、零下35度の厳寒と栄養失調で多くの仲間を失い…「これが一番辛かった」と話します。

昭和22年、復員。ナホトカから舞鶴港へ日本の地に。

「父は、14で志願した私が復員するまで毎日、氏神様に無事を願ってくれていたと聞き、ありがたい…」と声を詰まらせます。

戦後70年の今。寅二さんは、「健康第一。若くして亡くなった仲間たちの分も、元気に長生きしなくちゃね」とにっこり。今月は金沢で開催の『一千万人ラジオ体操・みんなの体操祭』に指導員仲間たちと参加しました。「平和に感謝だね」と…



ラジオ体操指導員仲間の土屋さんと寅二さん（左）三島楊子公園にて ７月

満州開拓青少年義勇隊は、満 15 ～ 19 才の青少年が全国から毎年１万人ずつ集められ、終戦までの８年間に、約８万６千人が満州に渡り、うち２万４千人が若い命を落としたとされています。

戦火を生き抜いてきた方たちの高齢化により真実の声が消えてしまう…と戦後60年を機に企画された文集出版『語り継ぎたいあの大戦』に寄稿した叔母（昭和15年生まれ）の手記からの抜粋です。

これは、戦争・空襲の記録であるとともに我が家の歴史でもあります。生前、きっかけもなかったことから、当人たちの口からは語られなかった事実を知ることができました。

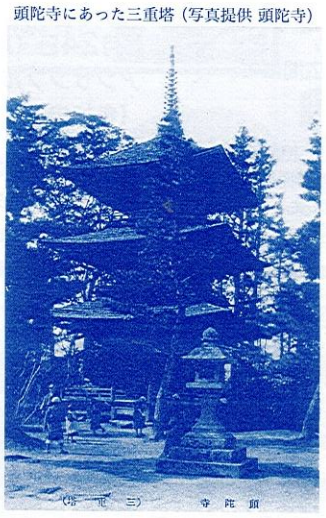
本、写真、ドラマ、映画で観た戦争をよりリアルに知り、感じることができた貴重な機会となり、記録・記憶の大切さを痛感しました。

記者Ｆ

『五歳の記憶』

吉野さと

頭陀寺にあった三重塔（写真提供 頭陀寺）



～

夜、空襲がくると、母は、大急ぎで電燈のまわりに黒い布をまいて、子供三人を這わせて防空壕まで連れていった。そんな時は、暗いこともあってとてもおそろしかった。

空襲警報が、頻繁な時には、入りっぱなしになることもあった。警戒警報だとサイレンがゆっくりと鳴り、飛行機が接近すると、激しく鳴って知らせてくれた。それをめやすにして、防空壕に入るタイミングをはかっていたのだ。

時として間に合わず、飛行機が頭上に飛来してきたこともあって、常に緊張感を強いられていた。家から十分程の所に頭陀寺という大きなお寺があった。畑ばかりが続く先に、寺の全景が我が家から見えた。特に、本堂と三重塔は、とても風格があった。しかしこの寺も、昭和二十年四月の空襲で爆撃され全焼した。

あれは夕方だったのだろうか。

燃え盛るオレンジ色の炎を見て、まるで絵本のなかの龍がのたうっているような気持ちがして、私は泣きべそをかいた。父は、悲しそうな顔で燃える寺を見ていた。

～

昭和二十年七月二十九日、遠州灘沖に停泊した米軍の軍隊から艦砲射撃の攻撃が始まった。艦載機が先に飛来してきて、照明弾を投下し、その光の方向に爆撃攻撃をしてくるのだ。そればかりか歩いている人に機銃掃射で攻撃し、隣のおばさんは、弾が足を貫通して歩けなくなった。

その日、空襲警報のサイレンがなったのであわてて防空壕に入ると、いままでとはケタ違いの攻撃がはじまった。轟音と共にバリバリと木が裂けるような音がした。近くで爆弾の爆発するような音もした。続けての攻撃に、外の世界はもうめちゃめちゃに壊されてしまっているのではないかと、恐怖心だけが私を支配していた。

父が、がっくりと肩をおとして言った。

「もう、家はないかもな」

あたりがふいに静かになった。

～

隣のおじさんがあわてて走ってきた。

「平田さんの防空壕がやられた。お母さんとのりちゃんが生き埋めになったらしいよ」

片手にシャベルを持ちながら一気に喋った。

父も近くに置いてあったシャベルをわしづかみにして走っていった。

「防空壕の中に筍竹がはいっていたので、そのしたじきになってしまった。コンクリートの防空壕もよくなかったなあ」

呟くように父はいった。

ふたりは圧死していた。

のりちゃんは私と同じ年の遊び友達だった。死ということが、よく理解できないまま私は平田さんの家に駆けていった。爆風で家の戸がみんな吹っ飛んで、部屋の中がまるみえだった。座敷にふたりは寝かされていた。

～

記録によると、太平洋戦争時の浜松市は、二十七回にわたり空襲を受け、そのほとんどが、B29爆撃機によるものであった。B29から爆弾や焼夷弾が、雨のように落とされたのだった。

絶望の凍土

太平洋戦争 最後の証言

〈4〉

奪い合うパン一切れ

凍り付いた松林を、男たちの引くそりが進む。あばらをむき出しにした全裸の遺体が、荷台に横たわる。全身を分厚い外套で包んだ男たちは何も話さず、雪を踏みしめる音だけが響く。

名古屋市中村区の四九〇部隊上等兵、池田鐘一（六）は、死んだ仲間の葬列の中にいた。やせ細った遺体は軽く「そりを引く手応えがないほどだった」。

墓穴を掘るが、凍った土は十センチも掘れない。遺体を地面に置き、雪やごみをかぶせた。「すまんな」。手を合わせ、心でわびた。

一九四五（昭和二十）年、シベリアに連行された兵の多くが、最初の冬を越せなかった。遺体は裸にされ、気を付けの姿勢で凍る。丸太のように倉庫に積まれた戦友たち。池田が「早く埋めてやってくれ」とソ連兵に頼むと、「黙れ」と一喝された。自分たちで埋葬するしかなかった。

森林伐採や土木作業の合間に与えられる食事は、厚さ二センチほどの黒パン一枚と、キャベツの葉が数枚入ったスープだけ。全員が栄養失調になった。

当時三十三歳の二等兵、織田稔＝愛知県春日井市＝は、その惨状を手記に記した。太ももの肉がそげ落ち、手でつかむと手首のように片手の輪の中に収まった。足に力が入らないと、イヌも捕らえて、丸焼きにした。

愛知県愛西市の一等兵、横井清正（五）は道ばたで凍った「ジャガイモ」を拾った。宿舎に戻って飯ごうで煮ると、鼻をゆがめる臭気が立ち上った。黄色い液体とわらが浮いている。ジャガイモではない。便所の踏み台に上がれず、小便を垂れ流してしまう。

一日分の黒パンを切り分ける夜は、収容所に殺気がこもる。ほおがこけ、目玉を見開いた兵たちが、当番の手元を凝視する。「あいつの方が多いぞ」。ナイフを入れる当番の手が震える。分銅や定規で正確に計り、切りくずも均等に分けた。

愛知県刈谷市の一等兵、安形光雄（六）は夜になると、三河湾の日間賀島や篠島で食べたタイの塩焼き、ハマチの刺し身を思い出す。「あの魚が食べたいなあ」。生つばをのみ込む音が響く。「うるさいっ」。空腹にたえかねた兵が怒鳴った。

飢えた兵は作業の合間、食べ物を求めて雑木林をさまよう。草花はもちろん、ヘビ、ウサギ、イヌも捕らえ次第、丸焼きにした。

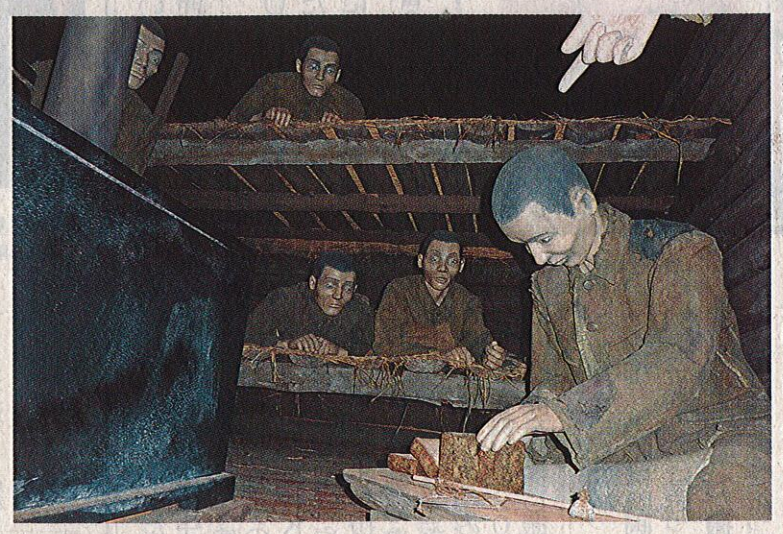
横井はある日、仲間に呼び出された。七、八人が輪になる。一人が切り出した。「この中で誰かが死んだら、そいつの肉を食って生き延びよう」。横井もうなずいていた。指を針で刺して血判し、名前を書く。「故郷には栄養失調で死んだと知らせる」と約束したが、実行はしなかった。

衛生状態が悪化し、赤痢がまん延する。池田も赤痢で倒れ、一日に四十八回も下痢をした。「次は俺の番か」。丸太になって倉庫に積まれる自分の姿が脳裏に浮かんだ。

夜明け前、宿舎入り口につるしたブリキ缶をソ連兵が打ち鳴らし、起床の号令をかける。隣の兵が起きてこない。毎朝のように誰かが死んでいた。

遺体を囲む兵たちが、目配せする。次の瞬間、遺体のわきに置かれた夕食のパンを奪い合う。戦友が死んだことは、夜まで監視兵に報告しない。

（敬称略）



収容所内を再現した模型。パンを切り分ける当番を他の兵が厳しく見つめている＝東京都新宿区の平和祈念展示資料館で

連載への感想や体験談をお寄せください。

〒460 8511 （住所不要） 中日新聞社会部「絶望の凍土」取材班

・ファクス 052(201)4331・Eメール shakai@chunichi.co.jp

絶望の凍土

太平洋戦争 最後の証言

〈6〉

地元民の人情支えに

トロッコを引く鎖が肩の肉に食い込む。れんが百個を山積みした鋼鉄の車両が、ゆっくりとレールを進む。「アジン、ドゥバ（一、二）…」。前後で鎖を握る二人の労働者が、声を絞り出して呼吸を合わせている。

一九四六（昭和二十一）年四月。静岡市清水区の四九〇部隊一等兵、山本明治（六七）は、シベリア・ウランウデのれんが工場にいた。土を練った生れんがを乾燥室へ運ぶ。重さ七百キロにもなるトロッコを引き、一日八十回以上も往復する。

ペアを組んだのが、ロシア人女性のトーシャだった。当時二十一歳の山本より四つほど年上。アジア系の顔立ちに、青い目が印象的だった。社会主義のソ連では女性が工場で働くのは一般的。貧しいシベリア地域では、抑留者らと同じ職場で働く女性もいた。

昼休み。山本は食事もせずに目を閉じる。「どうして食べないの？」。トーシャが尋ねた。前夜に配られるわずかな黒パンは、空腹に耐えきれず食べてしまう。昼食に食べるものは何もない。

トーシャは自分のパンとサラダを全部くれた。次の日からは二人分の昼食を、自宅から持ってきてくれた。

夕食にも招かれた。トーシャの家は、火事で焼けた跡のような木造家屋だった。衣服もすり切れたものばかり。貧しい暮らしなのに捕虜の食事まで世話してくれる。「彼女がいたから私は生きられた」。トーシャの優しさは生涯忘れない。

山本は、日本で東海道線の運転士をしていたことを話した。トーシャの夫や子どもたちは「日本では電気で列車が走るのか」と驚いた。「でも、戦争で負けなざしを向けた。ニーナは日本の歌舞伎や能について知りたがった。溝口は片言のロシア語で懸命に話した。彼女といるときだけは捕虜であることを忘れた。毎日のように家に通い、ニーナの父の肖像画を描いて贈った。

日本兵を家畜扱いするソ連兵とは異なり、職場や町で出会うロシア人は人情深かった。

「おまえも労働者の仲間だ」と肩をたたいてくれたり、「柔道を教えてほしい」と頼んできたり。「娘を嫁にやる」と言われた兵もいた。

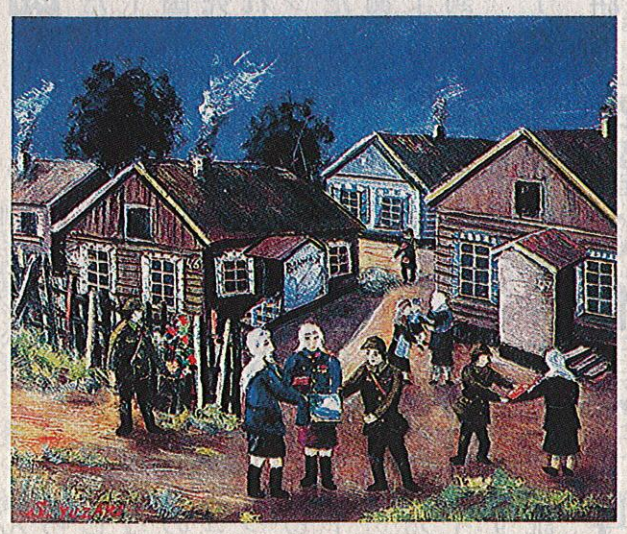
診療所の建設工事に回された浜松市天竜区の上等兵、溝口清司捕虜であることを忘れた。毎日のように家に来た。「ネッカチーフにでもしてくれ」と、昼食を持ってきた。何もお礼をしたい。山本は荷物の底にずっと隠し持っていた新品の赤いふんどしを取り出した。「日本人だったら捕虜を見下すが、彼らは対等に接してくれた」と溝口は言う。

れんが工場での労働が二年を過ぎても、トーシャは山本のために昼食を持ってきた。何かお礼をしたい。山本は荷物の底にずっと隠し持っていた新品の赤いふんどしを取り出した。「日本人だったら捕虜を見下すが、彼らは対等に接してくれた」と溝口は言う。

れんが工場での労働持たせてくれたお守りの品。「ネッカチーフにでもしてくれ」と、トーシャに手渡した。

戦争で困窮していたソ連で、木綿の赤い布地は貴重だった。「スパシーバ（ありがとう）」。トーシャは心からうれしそうだった。少しだけ、ソ連の人々と心が通い始めた。皮肉にも、彼女たちとの別れの日も近づいていた。（敬称略）

富山県出身の抑留経験者、故勇崎作衛氏が描いたロシア人との交流。富士山の絵と黒パンを交換している＝「キャンバスに蘇るシベリアの命」（創美社）より



連載への感想や体験談をお寄せください。

〒460 8511 （住所不要） 中日新聞社会部「絶望の凍土」取材班

・ファクス 052(201)4331・Eメール shakai@chunichi.co.jp

静岡新聞 夕刊 2月9日(月)

大陸の花嫁 ①

夢断たれ壮絶な逃避行

日がな一日、日だまりで本を読む。赤く火照った頬を緩めて「日本はあったかくていいよ」。牧之原市新庄の紅林ことさん(91)は、暮れゆく激動の人生を、今穏やかに過ごしている。

太平洋戦争末期、ことさんは日本の傀儡(かいらい)国家となった満州（中国東北部）に渡り、竜山（りゅうざん）福田開拓団内の竜山開拓女塾（じょじゅく）に所属した。しかし敗戦直後の逃避行で帰国の機を逃し、吉林省の農村で半世紀を過ごした。日中の国交が回復し、1974(昭和49)年に手紙を出すまで、実家に生存を知らせることさえかなわなかった。

■

日本が制海権を失った42(同17)年6月のミッドウェー海戦の敗北が隠されたまま、当時の新聞やポスターには「大陸の花嫁」募集の記事が躍っていた。19歳のことさんは、県内出身者で構成する竜山開拓女塾に入ることを決めた。愛国心と、大陸への夢でいっぱいだった。出発の日、母の墓前で手を合わせ、父に別れを告げた。

春の満州には、緑の草原が広がっていた。肥沃（ひよく）な土地は実りも多く、耕しがいがあった。ことさんは滞在期間を延長し、見合いした山口県の開拓団員の元に嫁いだ。「暗闇で偶然手が触れた相手と結婚したようなものよ。でも幸せだった」と笑う。しかし、新婚生活は1年余りで幕を閉じた。8月のある日、夫に召集令状がきた。「開拓団員は召集されないんじゃなかったの」。唇をかむことさんの肩に手を置き、夫は去っていった。終戦はすぐそこまできていた。

■

4日後、「数日出掛ける準備を」と緊急招集があった。男性は皆出征してしまい、留守を預かっていた女性と子ども50人で別の開拓団に向かった。だが、ようやく着いたのに誰もいない。駅に行っても日本人は見当たらない。「おかしい」。近くで倉庫が燃え、深夜の駅は中国人であふれ返っていた。一行は略奪で空になった倉庫で夜を明かした。

数日のはずが、何日たったのか分からないほど広野を歩いた。ある日、平原にソ連軍の戦車が現れ、銃撃を受けた。散り散りになって高さ2㍍ほどのコーリャン畑に身を隠した。だいぶ前に食糧も尽き、もう限界だった。「敵に殺されるくらいなら」。自決を促す誰かの言葉に、皆でうなずいた。銃弾が少なく、2人で抱き合った女性たちを、同行した団員が撃ち抜いていく。ことさんの前で弾切れになった。畝に伏せたことさんの上で、団員は刀を抜いた。

■

血の海の中、ことさんは目を開けた。自分だけ息を吹き返したのだった。動かない女性の乳に赤ちゃんがすがりついていた。別の畑に逃げた幼い兄妹が、探し当てた母親の遺体に何か叫んでいた。ふと現れた中国人が赤ちゃんを連れて行こうとした。「やめて」。兄妹は泣いた。「連れて行ってもらえれば、赤ちゃんは助かるよ」。割腹した団員は切れ切れの息で諭すと、自らにとどめを刺した。ことさんは、声を掛けられなかった。

体が水を求め、ことさんは立ち上がってふらふらとさまよい始めた。「死ねない」。自分の生命力を呪いながら歩き続けた。

気付くと、暗い民家に寝かされていた。どこかで気を失ったのか、誰かに導かれたのか、どうしても思い出せない。中国人が傷の手当てをしてくれた。言葉が通じないことさんに、一人の男性が「日本敗戦」と紙に書いて見せた。

◇

敗戦直前、南下するソ連軍に追われ、満州の開拓地に取り残された人々は壮絶な逃避行を強いられた。県内出身者も約9千人のうち2割近くが命を落とした。開拓団には〝大陸の花嫁〟を受け入れる女塾があった。「お国のため」。周囲の男性たちが次々と出征していく中、本県開拓団では唯一の「竜山開拓女塾」を目指す女性たちがいた。



優しい表情を浮かべる紅林ことさん。壮絶な体験があったとは感じられない ＝1月中旬、牧之原市の自宅



メモ

竜山開拓女塾　満州には県単独・混成などによる約千カ所の開拓団があった。このうち16カ所に女性向けの女塾が置かれ、1943(昭和18)年に設立のピーク（6カ所）を迎えた。本県も各地域ごと約40の開拓団があり、42年には竜山福田開拓団内に唯一の竜山開拓女塾がつくられた。県中西部を中心に20歳前後の女性124人が4期にわたって入った。半年間の勤労奉仕を経て多くが帰国したが、滞在延長し、見合いで結婚した女性もいた。

▷7

しずおか戦後70年×こちら女性編集室

〒422-8033 静岡市駿河区登呂3-1-1
静岡新聞社
電話〈054〉282-1111
月決め2,900円 本体2,685円 消費税215円
1部50円（消費税込み）
©静岡新聞社2015
浜松総局 浜松市中区旭町11-1 プレスタワー内 電話〈053〉455-3355
東部総局 沼津市魚町1 サンフロント内 電話〈055〉962-0380

静岡瀬名 静岡市葵区瀬名4629-1
静岡広野 静岡市駿河区広野1494
ケアセンター 静岡市葵区長尾39-5

静岡新聞　（第三種郵便物認可）

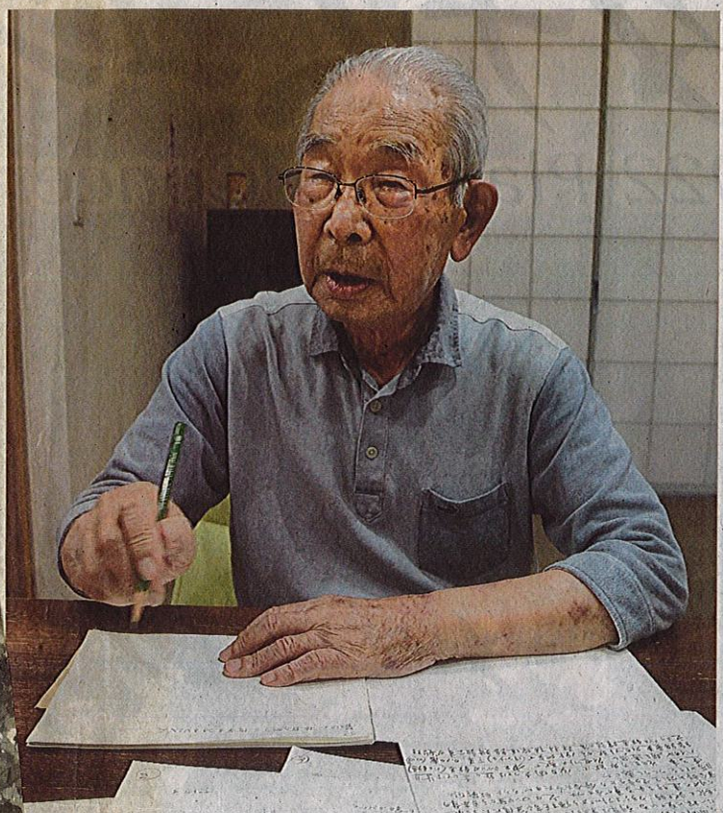
戦禍の民

しずおか戦後77年とウクライナ

無念の抑留「命何より重い」

シベリアで強制労働 戦友失う

2



シベリア抑留の経験を語る佐々木暢也さん。「命ほど重いものはない」と訴える



1946年の冬、旧ソ連中部に位置するタイシェット近郊の収容所。10人ほどのソ連人の作業監督が死んだ抑留者を埋めるため、地面に穴を掘っていた。酷寒の中、栄養失調でやせこけた亡きがらは凍り付いていた。作業監督はまるで物を割るように遺体をたたき壊し、バラバラにして穴に放り込んだ。30人分はあっただろうか。

旧満州のハルビンで終戦を迎えた佐々木暢也さん(96)＝掛川市＝は、シベリアでバム鉄道の建設作業を強いられていた。「人間の扱いじゃない」。涙を流しながら埋葬の様子を見ていたが、抑留の身ではどうすることもできなかった。無念さとともに「こんな所では死にたくない」との思いを強くした。

終戦後、ソ連の捕虜となり、他の日本兵らとともに牡丹江から列車で移動し抑留された。タイシェットから東に約340㌔のブラーツクまでの区間で3年間、強制労働に従事した。森林伐採や線路の枕木の運搬。食事はわずかなパンやかゆが中心だった。作業にノルマが課せられ、達成できなければ少ない食事をさらに減らされた。飢えと重労働、不衛生な環境で年長者から力尽きていった。無残に埋葬される場面を目にしたのは一度や二度ではない。

47年の冬。親しくしていた戦友が衰弱し亡くなった。こっそり盗んだセメント袋に名前と住所を記し、小指を切断して一緒に持ち続けた。「せめて体の一部だけでも遺族に届けたかった」。しかしナホトカから帰還船に乗る直前、身に付けていたものを全て没収された。

抑留生活では共産主義教育も行われた。佐々木さんは「啓蒙（けいもう）宣伝部長」を命じられ、帰還者の面接をする事もあった。生き延びるためとはいえ、本心を偽り、共鳴したふりをするのはつらかった。

数年前から自身の半生をつづっている。今年に入りシベリア抑留の経験を記す段階に差し掛かった頃、ロシアがウクライナに侵攻した。報道で目にする破壊された病院や一般市民の犠牲は、かつて満州で見た敗戦直後の街を思い起こさせた。ロシア国内の弾圧のニュースにも接した。戦っている兵士や市民の本当の気持ちは想像しかできないが、「意に反して苦しんでいる人もいるだろう」。抑圧され、不条理な命令にも従わなければならなかった軍隊や抑留生活での経験とも重なる。

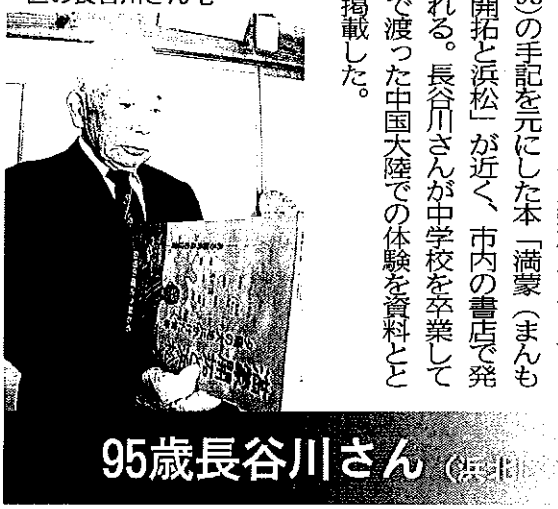
過去の戦争も、今起きている戦争も本質は変わっていない。「命ほど重いものはないはずなのに」。佐々木さんは問い続ける。「国益のための侵略や戦争は繁栄をもたらさない。なぜ、平和という共通の目標に向かって各国が協調できないのか」

シベリア抑留　第2次世界大戦終結後、旧ソ連は日本兵や民間人約57万5000人を拘束し、シベリアやモンゴルの強制労働収容所に移送した。鉄道敷設のほか、道路、建物の建設、農作業なども課した。厚生労働省によると、約5万5000人が飢えや寒さなどで抑留中に死亡した。1947年から帰還が本格化し、ソ連との国交が回復される56年まで続いた。

■ＥＬＮＥＴ■
※無断複製・転載禁止

満蒙開拓体験 著作化

浜松市浜北区の長谷川鐵雄（てつお）さん(95)の手記を元にした本「満蒙（まんもう）開拓と浜松」が近く、市内の書店で発売される。長谷川さんが中学校を卒業して単身で渡った中国大陸での体験を資料とともに掲載した。



出来上がった本を眺める長谷川さん＝浜松市浜北区の長谷川さん宅

市内書店で近く発売

長谷川さんは龍池村立龍池国民学校（現在の北浜東小）高等科を卒業した１９４２年３月、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に、６月に満州の黒河省大額訓練所に入所、45年５月には北安省北斗開拓団に入植した。同年８月13日に招集され、終戦後は新京（現在の中国・長春市）に逃れ、46年７月に引き揚げた。帰郷後は三方原地区の開拓に携わり、旧浜北市役所に勤務した。

本は長谷川さんが家庭の事情などで満蒙開拓青少年義勇軍に志願した経緯、入所後の倉庫番や連絡係、野菜の貯蔵といった仕事の話を記述。終戦間際に軍に入隊した時のエピソード、終戦後まもなく入植地域で略奪や傷害事件が激しくなり、女性や幼児を守りながら逃げた経験が記されている。

執筆と編集は別の満蒙開拓者らの体験談をまとめた著作も書いている柴田宏祐さん(81)＝浜松市北区＝が担当した。長谷川さんは「国のためを思い、大陸で少年期を過ごした。そんな時代があったことが今の世にも伝われば」と語る。

Ａ４判94ページ。税込み千円。谷島屋書店の浜松本店、サンストリート浜北店などに置かれる予定。

（浜北支局・松浦直希）

◎中日新聞　2020年08月28日　朝刊33面　記事数：1/1　＜1/1枚＞
戦後７５年　夏　王道楽土の先に　満蒙開拓青少年義勇軍　（上）　「お国のため」　誇り高く　殺す。殺される。殺す。これが戦争

■ＥＬＮＥＴ■
※無断複製・転載禁止

「お国のため」誇り高く

王道楽土の先に

満蒙開拓青少年義勇軍

殺す。殺される。殺す。これが戦争

戦後75年 夏

旧満州（中国東北部）の開拓や治安維持を志し、全国から少年が大陸に渡った。軍人になることを約束された彼らは「満蒙開拓青少年義勇軍」と呼ばれた。静岡県からも国民学校を卒業したばかりの十四、十五歳の三千人強が「王道楽土」を目指した。戦後は十年余に及ぶ抑留生活を強いられた人もいて、県の移住史などによると、四百五十五人が故郷に戻ることなく、海の向こうで命を落とした。（谷口武）

太平洋戦争が開戦した一九四一年十二月。小笠郡（現掛川市）の農家の三男坊に生まれた松本元吉さん（九二）＝浜松市中区南浅田＝は国民学校の卒業を間近に控えていた。

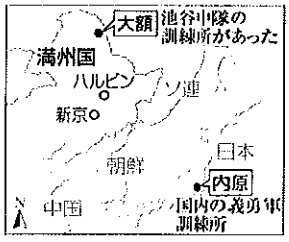
「北のロシヤ（ソ連）が満州を奪うことをたくらんでいる」。先生は盛んに口にし、義勇軍の存在を教えてくれた。お国のため、家のために尽くせる。これ以上ない進路だと思った。

寒い冬の夜、一人で夜なべ仕事をしていた母に打ち明けた。「おれ、満州行きたいけど」。二時間ほど話し合った。本音は反対だったのだろうが、母は涙を流しながら、志願を許してくれた。

配属されたのは、現在の島田市など志太郡出身者を中心に約三百二十人で編成された池谷中隊。

現在の水戸市にあった内原訓練所で二カ月半、開墾作業や小銃の軍事教練をした後、四二年五月二十五日、朝鮮半島から列車で満州へ向かった。十四歳だった。

黒河省（現黒竜江省）の大額訓練所に入った。幅五百㍍ほどの黒竜江を越えた対岸はもう、ソ連だった。



「どう見ても満州の方が貧弱だった。衣食住全てにおいて」

土地を耕し、生産できるのは大豆やジャガイモぐらい。「家畜の餌と変わらない。結局『腹が減っては戦はできぬ』と向かう先は中国人の畑や倉庫で、農作物を奪うことだった」

冬場は氷点下四〇度にもなる地で、身を温めてくれる毛皮は帽子だけ。他は全て綿製だった。厳寒地で夜通し交代なく、義勇軍の一人として、対岸のソ連の動きを察戒した。

戦局の悪化は嫌でも察した。故郷からの手紙で、本土で空襲が続いていると聞いた。召集され、海を渡ってくる軍人は四十～五十代の年配者が急速に増えた。国境間際の最前線で、疲れ切った兵士の士気は明らかに落ちていった。

四五年八月九日午前十時ごろ、翼に星の印を付けたソ連の飛行機が飛んできた。「迷い込んできたのか」。地元の中国人から、ソ連が参戦したと聞いた。

関東軍から具体的な指示があるのではと思って待ったが、軍は黒河の街を既に引き払っていた。「無責任さに、あきれるしかなかった」。ソ連や現地人から逃げ回る日々の始まりだった。

「全てがお国の戦争のために。それしか教わってこなかった」と振り返る松本さんは、九年前に手記をつづっている。

全二十六㌻のうち、半分以上を逃避行の野宿生活に割く。歩けなくなった老兵の自爆、幼い二人の娘を銃殺した両親…。そして、手記はこう結ぶ。「殺す。殺される。殺す。これが戦争なんだ」





㊤義勇軍に入隊した頃の松本元吉さん㊧
㊦義勇軍の訓練所のあった黒河省の大額を指す松本元吉さん＝浜松市中区南浅田で

県内から3059人志願

満蒙開拓青少年義勇軍　「王道楽土」（徳によって公平に治められた理想的な国の意味）や「五族協和」をスローガンに、1932年に建国された満州国の開拓を目的に、農業教育を推進していた満州移住協会の加藤完治（1884～1967年）らが創設した。成人し、現地に慣れた後は軍に入隊する位置づけだった。「昭和の白虎（びゃっこ）隊」「第二の屯田兵」などと新聞や雑誌で宣伝され、38年からの8年間で計約8万6000人の少年が海を渡った。長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館によると、静岡からは全国でも6番目に多い3059人が参加した。研究者の枝村三郎さん（82）＝藤枝市藤岡＝によると、多くは親思いで貧しい小作農の次男や三男だったといい、地元有力者や教師が積極的に参加を促した。池谷中隊を率いた池谷台輔も教師から中隊長に転身した。

◎中日新聞　2020年08月29日　朝刊29面　記事数：1/1　<1/1枚>
戦後７５年　夏　王道楽土の先に　満蒙開拓青少年義勇軍　（下）　生か死か　悲劇の旅路　戦争につながる芽は潜んでいる。

■ＥＬＮＥＴ■
※無断複製・転載禁止

生か死か 悲劇の旅路

王道楽土の先に（下）

満蒙開拓青少年義勇軍

一九四五年八月九日、ソ連の参戦により、静岡から「満蒙開拓青少年義勇軍」池谷中隊は散りぢりとなった。旧満州（中国東北部）に渡った



㊤義勇軍だった夫・健次さんの手記を振り返る鈴木三千代さん。手前の写真は満州で亡くなった長男の正志ちゃん＝三島市谷田で
㊦義勇軍に所属していた頃の鈴木健次さん

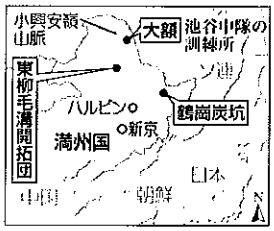
戦後75年 夏

当時十八歳の鈴木健次さん（二〇一五年に八十八歳で死去）は一カ月の逃避行の末、翌九月、東柳毛溝開拓団（現黒竜江省）にたどり着き、後に妻となる三千代さん（九二）＝三島市谷田＝に出会った。

本土では敗戦を受け入れ、連合国軍による占領が始まっていたが、大陸はなお戦場だった。

戦後、当時の記録を残そうとまとめた「北辺の旅路」の編集に携わった健次さんは「生か死か。一カ月余の逃避行は俺達、義勇隊拓友にとって生涯忘れることのできない悲劇と生き地獄の旅路だった」と回想している。

ソ連との国境地帯に配備されていた池谷中隊。雨が毎日降る中、健次さんら二十六人は歩いて南下するしかなかった。食べ物は開拓団から連れてきた愛馬だけだった。川を渡り、二人が流された。



「異様な姿だった」。三千代さんが初めて見た健次さんらは着の身着のまま、靴は破れ、足は水虫で腫れ上がり、歩くのがやっとだった。

四六年二月、ひたすら農作業に励む健次さんと結婚した。九月には引き揚げが決まった。「ようやく帰国できる」と思ったのもつかの間。七年に及ぶ抑留生活の始まりだった。中国共産党の解放軍に連れられ、一行が乗った列車が向かった先は港ではなく、炭坑（現黒竜江省の鶴崗炭坑）だった。「だまされた」

過酷な労働と栄養失調で、毎日五―六人が亡くなった。姉はチフスで三日間高熱に浮かされた末に力尽き、健次さんとの間に生まれた正志ちゃんも肺炎で、わずか九カ月の命だった。自身も肺を患い、「今度は私かな」と何度も思った。

苦しい時に救いになったのは、豆乳や母乳を分け与えてくれた中国人の優しさだった。

五三年五月、帰国がかなう。健次さんは十一年、三千代さんは九年ぶりの祖国。現地で戦病死したことになっていた健次さんは船から下りたとたん、取材を受けた。友人たちは「健次、次に死んだら香典はもう出さないからな」と笑って迎えてくれた。

日本での新たな生活に際し、支給されたのは鍋や釜など、生活用品の一式だけ。夫婦で共働きし、ゼロから生計を立てた。

健次さんは時折、「おらもひどいことをしてきた」とつぶやいた。逃避行の際、自分たちの居場所を知られないよう、情報をくれた中国人を信用できず、井戸に突き落としたという。

「あの戦争がなかったら…。自分も含め、皆、洗脳されていたんだと思う」と三千代さんは言う。

安保闘争や地元のコンビナート建設反対など市民運動に身を投じた。「七十五年たっても、戦争につながる芽は身近に潜んでいる」。日々、健次さんと正志ちゃんの遺影に手を合わせ、平和を祈る。（谷口武）

戦争につながる芽は潜んでいる。



軍人と扱われず

義勇軍か義勇隊か　静岡県内からも14、15歳の3000人強が義勇軍に参加し、植民地化の先兵として送り出された。軍と同様の訓練を受けていたにもかかわらず、未成年で終戦を迎え、軍人や軍属として扱われなかった人も少なくない。関東軍は「日満関係上、軍と呼ぶのは不適当」として、満州国内では「義勇隊」と呼ばれた。満州開拓に詳しい筑波大の伊藤純郎教授（日本近代史）は「義勇軍はソ連参戦以降の被害が強調されがちだが、それ以前の現地での加害者的な側面もある。国民全員が協力することになった戦争の事実を掘り起こし続けなければならない」と指摘する。

印刷日時：2025/10/28 17:17:13 ユーザ：071540002 大阪府立中央図書館(原文出力用)　様
縮小率：80%

伝言 しずおか戦後80年

「シベリア抑留」を考える

50万人以上の日本兵らが戦後、主に旧ソ連の収容所に連行され、強制労働を強いられた「シベリア抑留」。約10人に1人が亡くなる過酷な収容所生活を経験した世代は100歳前後となり、体験を肉声で伝えることができる証言者はいまや数少ない。酷寒の地で何が起きていたのか。体験者の声、県内での継承の動きを通して、「凍土の記憶」を次代に引き継いでいくために何ができるかを考えたい。（教育文化部・大須賀伸江、鈴木美晴、浜松総局・真田翼）

酷寒の地 強制労働

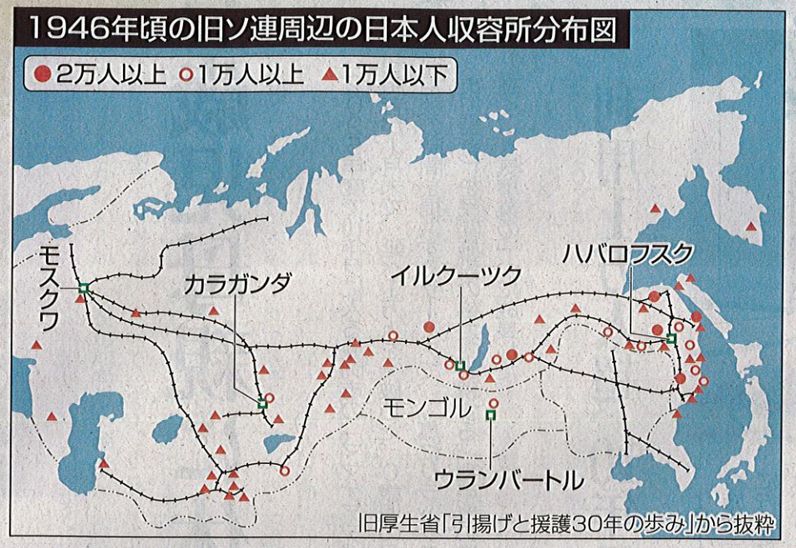
1945年の第2次世界大戦終結直前の旧ソ連の侵攻を受けて、旧満州（中国東北部）などに残されていた日本兵らが捕虜としてシベリアなどに連行され、その後約10年にわたって強制労働をさせられた。多くはロシア兵から「日本に帰国する」と言われるまま列車に乗せられ、各地の劣悪な環境の施設に送られた。「シベリア抑留」と特定の地域名が使われた用語が普及しているが、実際はモンゴルや中央アジアなど広域で、数千に及ぶ収容所に分散した。

日本人収容者は厚生労働省の発表では約57万5千人、死者数は約5万5千人。約10人に1人が日本に帰国できず命を落とした。木材の伐採や鉄道の敷設、鉱山での作業などで重労働を課せられ、決められた1日の業務を達成しないと現場に戻された人も。極寒をしのぐ衣類は足らず、食事は手のひらに乗るサイズの小さなパンと、何も入っていない湯のようなスープで栄養状態は悪く、死者の7割は最初の冬に集中した。朝、起きない仲間を触ると冷たくなっていたという経験は、収容者の日常だった。

ふらつきながらの作業で倒木の下敷きになるなどけが人は多く、氷点下50度にもなる冬は金属製のおのに誤って触り凍傷になるなど危険にさらされた。宿舎は旧軍の上下関係で寝床の位置が決まっており、若手には過酷な場所が当てられたという。チフスなどの病気、トコジラミなどの害虫にも苦しめられた。

静岡県からの抑留者数ははっきり分かっていないが、死者数が約1300人、多くの帰還者を受け入れた舞鶴港（京都府舞鶴市）経由で1万2千人ほどが帰郷し、計1万3千人程度とみられる。帰還事業は46年末に始まり、日ソが国交回復する56年まで続いた。帰国と言われて抑留された不信感から、体験者の手記には船上から「懐かしい山々が見えてもまだ日本の風景か疑った」「同乗の日本人看護師に何度も行き先を確認した」との記述が多い。

静岡新聞には49年7月に帰還者45人が静岡駅に降り立ち、収容所で日々歌わされていた労働歌を輪になって踊り歌ったという記事がある。家族の顔を見てようやく解放されたとの実感が湧き、苦しみの象徴として労働歌を歌ったとみられるが、記事は「異様な光景」と表現し、「思想教育を受けた人の言動」ととらえた向きがある。帰還者は再就職が困難になるなど社会の差別にも直面し、壮絶な体験をしながらも長く沈黙を貫いた人は少なくない。



シベリア抑留関連年表

1945年8月	■終戦、抑留始まる
	■旧ソ連、モンゴルなどの収容所に約57万5000人が連行される
～46年冬	■各収容所で死者が続出
46年12月	■船による帰還事業開始
56年10月	■日本と旧ソ連の国交が回復
56年12月	■最後の引き揚げ



▼収容所での重労働の風景画（平和祈念展示資料館提供、佐藤清さん制作「伐採」）

高井寅二さん

終戦間際（静岡県富士宮市出身）で旧関東軍に入隊した高井寅二さんは、旧ソ連でシベリア抑留を経験した。人間が受けた苦しみを振り返り「平和で、誰もが『幸せだ』と戦争のない世界を託す。

高井さんは、日本と異変に気付くこともできないまま開拓青少年義勇軍として1941年、14年後に旧ソ連の収容所になく奉天（現中国瀋陽）で終戦を迎え、やイタリアに戻す」と

何が「楽土」だ

写真が語る戦争

「王道楽土」のスローガンにひかれ、旧満州（中国東北地方）には計約27万人の開拓民が入植した。しかし、戦況の悪化とともに、成年男子は「根こそぎ動員」で家族と切り離され、旧ソ連の参戦で女性と子供の多くが戦火の中に取り残された。7万人余りが命を落とし、ようやく帰国した人々にも苦難の生活が待ち受けていた。（永井靖二）



中央の丘は当時、「満州移民の父」の異名をとった関東軍将校の東宮鉄男（とうみやかねお）にちなみ、「東宮山（とうみややま）」と名付けられた。ふもとに「千振神社」、山頂に砲弾形の「忠魂碑」が建てられたが、いずれも旧ソ連軍に破壊された＝中国・黒竜江省樺南県福山村、溝脇正撮影

満州開拓団

遺骨抱え帰国 再び鍬を手に

「この16人のうち、帰国できたのは11人。生きているのは自分だけだ」

中島清一さん(98)は栃木県那須町の自宅で、千振郷富山村の開拓団員の集合写真を指でたどりながら言った。

軍刀を手にした中島さんは当時24歳。富山県東砺波郡山田村（現・南砺市）の農家の三男だった。第1次上海事変（1932年）から復員後、「地主になれる」と開拓団に応募した。33（昭和8）年7月に入植した「千振郷」（現・黒竜江省樺南県）は、旧満州北部の都市ハルビンから東へ約400キロ。開拓団員約500人は出身地別に16の村に分かれて住んだ。1年余り後、38人いた富山村の団員は抗日勢力に撃たれたり、帰郷したりして16人に減った。

中島さんは35年、郷里富山から兄嫁の妹を呼んで結婚、3男1女をもうけた。5～6世帯の中国人を雇い、20㌶余の畑でおもに大豆を作った。

旧ソ連の参戦で避難命令が出たのは45年8月11日。生活が軌道に乗って約1700人に増えていた千振郷住民のうち、17～45歳の男性約50人は兵隊に取られ、成人男性は7人だけだった。

中島さんも7月中旬に軍に召集され、吉林市で敗戦を迎えた。1カ月以上家族を捜し回り、牡丹江市郊外で、ぼろをまとった妻と長男、次男を見つけた。4歳の長女と1歳の三男は敗戦直前、赤痢で死んでいた。

中島さんらは新京（現・長春）に列車や徒歩で移動。同年11月、先着した千振郷住民が収容されていた満鉄（南満州鉄道株式会社）独身寮に合流した。

寮の避難生活は約9カ月に及んだ。6畳間に約15人が寝起きし、栄養失調と発疹チフスが蔓延（まんえん）。力尽きた人の呼吸が止まると、シラミの群れが別の人をめがけ移動した。廊下に毎朝、4～5人の遺体が並ぶ。最初は空き地に埋めたが、地面が凍結し、穴が掘れなくなった。遺体を野犬が食べた。

避難者らは、駅周辺で拾ったコークスを売って生活費にした。道ばたに落ちている白菜の切れ端も拾って食べた。



入植初期の千振郷富山村の集合写真。前列左から2人目、左手に軍刀を持っているのが、当時24歳だった中島清一さん。胸の勲章は、32年の第1次上海事変に従軍した際の勲八等白色桐葉章＝34（昭和9）年11月、黒竜江省樺南県、開拓団発行の冊子「千振　創刊号」の掲載写真を朝日新聞大阪本社が切り取り保存







キーワード

満州への移民政策　1932（昭和7）年、満州開拓移民は当初、試験的に在郷軍人を中心に「武装移民」の形を取って送り込む「武装移民」の形を取って送り込む（昭和11）年に広田弘毅内閣が20カ年で100万戸を送り出す計画を決定した後は、農村の次男三男を中心に集団で送り込む「分村移民」が主体となった。集団に加え、16～19歳の若者を訓練所経由で送り込む「開拓青年義勇隊」なども創設され、敗戦時の開拓民は27万人に達していた。

零下20度 凍てつく大豆畑

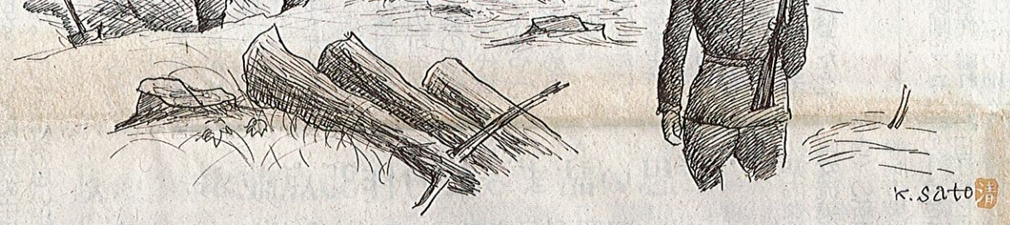
零下約20度。今年2月上旬、中国・黒竜江省の台地に積もった雪には風紋が深く刻まれていた。

旧満州北部に送り込まれた武装開拓団「千振開拓団」は1933（昭和8）年7月25日、同省東部の七虎力川流域にある「東宮山」で入植式を開いた。山頂に登ると、凍てついた大豆畑の向こうに樺南県福山村の集落が見えた。日本の敗戦まで「千振郷富山村」と呼ばれていた村だ。

現在、村は約200戸。古老の王樹山さん(82)は少年時代、開拓団員が小作人として雇った中国人に使われていた。「開拓団は怖かった。団員の飼い犬に襲われても、その犬を殴ることもできなかった」と振り返った。

周辺の農地は昔からあった分が約3分の1で、残り3分の2は戦後、開拓団はそれを取り開いたという。「開拓団は土地を買って代わりに取って代わったのではない。開拓団が自力で切り開いたと言えるものはほとんどない。途中で大勢の死者を出したのは、心からすまなかった」

山頂にコンクリートの建物の骨組みが残っていた。「忠魂碑」の跡だ。死者を供養した「忠魂碑」の風雪でぼろぼろになった。



高井寅二さん（浜松） 炭鉱で苦役、飢餓を体験

終戦間際の旧満州（中国東北部）で旧関東軍に所属した高井寅二さん（98）＝浜松市中央区＝は、旧ソ連軍の捕虜となりシベリア抑留を経験した。自身と仲間が受けた過酷な労働と飢餓の苦しみを振り返り「とにかく平和で、誰もが健康であってほしい」と戦争を知らない世代に願いを託す。

高井さんは満蒙（まんもう）開拓青少年義勇軍の一員として1941年に旧満州に渡り、4年後に旧関東軍に入隊。まもなく奉天（現在の瀋陽市）で敗戦を迎え、捕虜となった。「国に戻す」と言われて乗った列車は、日本とは逆方向に走った。異変に気付いたがどうすることもできない。仲間と覚悟を決めた。

カラガンダ（現カザフスタン）の収容所に入れられ、ドイツ人やイタリア人の捕虜とともに毎日炭鉱労働を強いられた。食事は1日2回。具のないおかゆと一切れのパンしか与えられなかった。重労働と栄養失調で倒れる人が相次ぎ、高井さんも親しい仲間約20人を現地で失った。高井さんは遺体を埋める大きな穴を掘らされ、帰国を果たせなかった無念を思い浮かべながら亡きがらを穴に投げた。友の思いを背負い「死んじゃいかん。家族の元へ帰らなきゃ」と自身と他の収容者を鼓舞し続けた。

冷たくなった友思い 平和への祈り続ける

解放の日は突然訪れた。抑留から2年後、働きが認められ「ハラショーラボータ」（優秀労働者）として早期帰還が許された。喜びは大きかったが、引き揚げ船に乗るまで誰も信用できなかった。港では、思想教育を受けたかつての同僚が、引き揚げ者の反抗姿勢に目を光らせていた。あと一歩でシベリアに再送還される仲間もいた。

舞鶴港に着くと深く安堵（あんど）し、「生きて帰れたんだという思いでいっぱいだった」。空襲で焼け野原となった浜松で苦労を重ねていた家族と再会し、喜びを分かち合った。

引き揚げ後は浜松の貨物運送会社で勤め上げ、市内の福祉施設などで抑留経験を語る慰問活動を行ってきた。「あんな戦争は2度とあってはいけない」。凍土に倒れた友を思い、言葉に力を込めた。

抑留の体験を語る高井寅二さん
＝1月中旬、浜松市中央区



戦後80年を迎え、抑留体験者の年齢は100歳前後となった。高齢で体験の証言ができなくなったり、寿命が尽きたりする人が増える中、県内では後の世代が継承に力を注いでいる。

県内の体験者や遺族でつくる全国強制抑留者協会の県

記憶を次代へ



完成した本を見る窪田由佳子さん（左）、多田つむぎさん（中央）ら＝2024年11月下旬、県立清水南高

動き出す2世、高校生も力に

組織には記録が残る1982年、1480人の会員がいた。現在、唯一の活動である慰霊祭への参列者は二十数人にとどまり、参列する体験者は加藤源一さん（100）＝静岡市葵区＝のみ。ロシアのウクライナ侵攻により、全国事業としてのロシアへの慰霊訪問や遺骨収集活動も途絶えたままで、「凍土の記憶」の継承には課題が多い。

同協会県支部事務局を担う体験者2世の望月文恵さん（70）＝富士市＝は「後の世代が『聞いておけば良かった』と後悔しないように、2世の私たちが語り継がなければ」と語る。毎年11月に同市の慰霊碑「平和の礎」で行う慰霊祭に合わせ、今年は初めて今後の継承の在り方を話し合う交流の場を設ける予定だ。「体験者の遺族に限らず、『知りたい』気持ちのある人に広く参加してほしい」と願う。

静岡市葵区の窪田由佳子さん（70）は2024年末、父一郎さんの抑留経験を描いた絵本「シベリアのバイオリン」（地湧社）を発行した。端材でバイオリンを自作して楽団を立ち上げ、演奏活動を通じて同胞を勇気づけるとともに自身も励まされ続けたという一郎さんの生きざまを通じて、抑留の過酷さだけでなく、希望を持つことの大切さを表現している。20年に書いた同名の小説（同社）がベースで、低年齢に伝えることができる絵本の制作は窪田さんの悲願だった。窪田さんから挿絵を依頼された清水南高3年の多田つむぎさんは、想像を絶する当時の体験談の「わからなさ」と向き合い、悩みながら作品を仕上げた。

40周年記念し式典

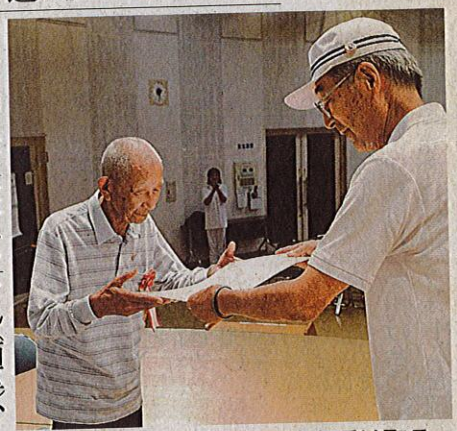
浜松ラジオ体操連盟 功労者を表彰 中区

浜松ラジオ体操連盟（内田一郎会長）は11日、設立40周年の記念式典を浜松市中区の南部協働センターで開き、ラジオ体操の普及に貢献した会員5人が表彰を受けた。

内田会長はあいさつで、地元企業や子どもたちの指導に取り組んできた歩みを紹介。「体操を続けながら元気に一生を過ごすという意気込みを持ち、これからもラジオ体操を大切にしてほしい」と話した。

同連盟として初めての会員表彰を行い、連盟の設立に尽力した倉田雄さん（中区）に表彰状を贈った。このほか、かんぽ生命保険やNPO法人全国ラジオ体操連盟などが全国の団体、個人をたたえる表彰でも4人が選出され、東海地区地方表彰に高井寅二さん（南区）、県表彰に内山あきるさん（同）、須山芳一さん（西区）、小池喜好さん（中区）が輝いた。

同連盟は1979年8月に設立され、現在の会員は約1260人。市内26会場でラジオ体操会を開いている。



内田会長（右）から表彰状を受け取る倉田さん＝浜松市中区の南部協働センター

肝臓病の公開講座 来月21日、磐田

浜松医科大付属病院は9月21日午前10時～正午、肝臓病に関する市民公開講座と患者サロンを磐田市見付の県中遠総合庁舎西館2階で開く。

磐田市立総合病院消化器内科部長の笹田雄二医師や浜松医科大付属病院肝臓内科診療科長の川田一仁医師が、ウイルス性肝炎や肝がんについて講演する。講演後は患者や家族の交流や情報交換会を行う。

申し込みは浜松医科大付属病院肝疾患連携相談室（電053（435）2476）または磐田市立総合病院肝疾患相談支援センター（電0538（38）5000）へ。

水道工事当番店

▼12日

◇中・東・西・南・北区（一部を除く）＝大和商会（南区白羽町（444）2301）

◇北区引佐町＝管理事業（金指（542）1030）

◇北区細江町＝ニシオ（気賀（522）0273）

◇北区三ケ日町＝中村工業（宇志（525）1275）

◇浜北区＝育伸配管（小松（587）0537）

▼13日

◇中・東・西・南・北区（一部を除く）＝スペック（沢井（西区大久保町（482）0168）

当番薬局

（12日）

休日当直医に関する問い合わせは、県救急医療情報センター（フリーダイヤル0800（222）1199）へ。

接骨院

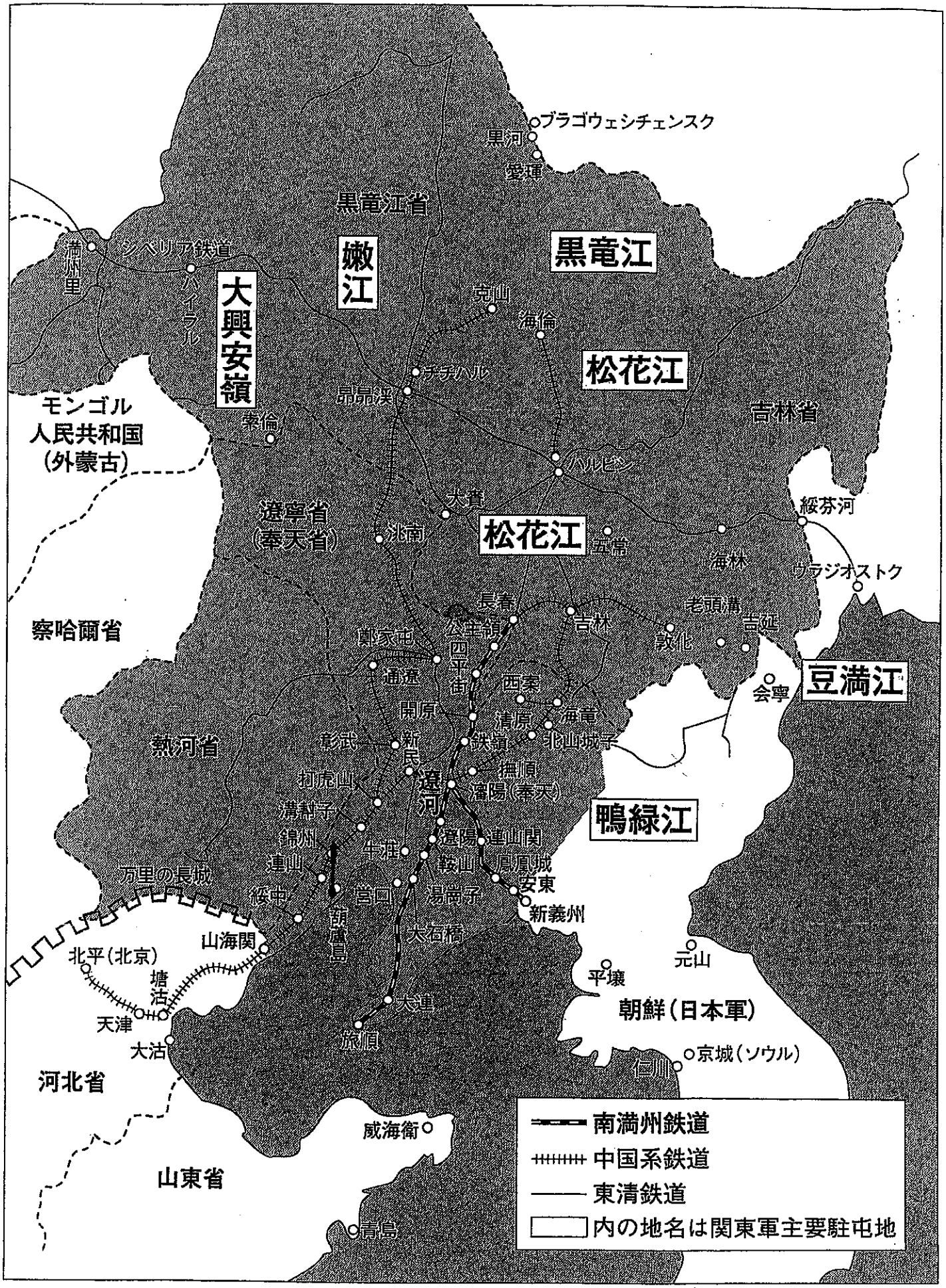
よこた接骨院（浜北区東美薗（586）1236）

【浜松】オレンジ（中区船越町（469）5177）杏林堂エキマチ店（中区砂山町（454）6790）杏林堂富塚店（中区富塚町（412）5037）杏林堂西伊場店（中区西伊場町（450）5475）杏林堂姫街道店（中区葵西3丁目（439）9311）杏林堂名塚店（中区名塚町（468）1715）フタバ（中区鍛冶町（454）3336）いなば（中区上島6丁目（474）1780）マツモトキヨシ浜松中央店（中区中央1丁目（456）5861）杏林堂ピーワンプラザ天王店（東区天王町（465）7431）わかくさ（東区笠井新田町（432）7011）杏林堂志都呂店（西区志都呂1丁目（415）0077）イオン浜松西店（西区入野町（449）5519）四季亭安堂（西区舞阪町弁天島（596）1671）杏林堂芳川店（南区四本松町（427）1712）杏林堂引佐店（北区引佐町金指（542）3855）おろファミリー（浜北区於呂（580）0789）杏林堂浜北店（浜北区本沢合（586）8811）

【湖西】古見（古見（574）3130）新居いずみ（新居町新居（523）8949）

真写で提供 掲載有料

掲載された写真は、希望者に有料で提供します。問い合わせ・申し込みは浜松総局業務部（電053（455）4100、月～金曜日の午前9時～午後5時）へ。



1931 年（昭和６）の満州（中国東北地方）

静岡新聞
9月21日
日曜日
〒422-8033
静岡市駿河区登呂3-1-1
静岡新聞社
電話〈054〉282-1111
月決め2,900円 本体2,685円 消費税215円
1部120円(消費税込み)
©静岡新聞社2014
浜松総局 浜松市中区旭町11-1 プレスタワー内 電話〈053〉455-3355
東部総局 沼津市魚町1 サンフロント内 電話〈055〉962-0380

シベリア抑留死者 本県1091人

厚労省が出身リスト

第2次大戦後の「シベリア抑留」により、旧ソ連で死亡した日本人推計5万3千人中、身元が判明した人の約9割に当たる計3万3909人について、厚生労働省が都道府県別に出身地をまとめていたことが20日、分かった。静岡県の1091人など計11都道府県で抑留死者が千人を超えている。

抑留死者については東京都の1832人。遺族らが個別の情報を把握している半面、全体像に関して分かっていない点が多く、実態解明を進める上で欠かせない資料になりそうだ。

共同通信が入手した資料によると、筆頭は東京都の1832人。静岡と東京を除く9道府県の抑留死者数は北海道1306人、新潟県1157人、愛知県1125人、大阪府1121人、広島県1111人、長野県1056人、山形県1041人、鹿児島県1031人、福岡県1030人。資料に個人名は記されていない。

人口が多かったり、中国大陸の旧満州などに入植した満蒙開拓団に多数が参加したりした自治体が含まれている。日本が一部領有していた樺太(現サハリン)など、現在の都道府県に当てはまらない地域の出身者も116人いる。

厚労省は旧ソ連や日本などの資料に基づく調査を重ね、身元が分かった抑留死者については2007年からウェブサイトで名簿を公開。名簿には出身地情報が明記されていなかったが、社会・援護局担当者によると、今年8月から都道府県名を付記した。

当初は個人情報保護の観点から出身地に関する情報の記載を控え「来年の戦後70年に向け抑留者名簿を一層充実させたい」(同担当者)として検討を重ね、公開に踏み切ったという。ただ、名簿は埋葬地別に分類するなどしているため、出身都道府県別の抑留死者を簡単に把握できないなど、出遅れが取れないかかっても遺

関連記事3面へ

シベリア抑留

都道府県別死者数

東京	1832人
北海道	1306人
新潟	1157人
愛知	1125人
大阪	1121人
広島	1111人
静岡	1091人
長野	1056人
山形	1041人
鹿児島	1031人
福岡	1030人

※厚労省まとめ

シベリア抑留 第2次大戦末期のソ連軍参戦で、中国大陸の旧満州などで捕らえられた日本の将兵や民間人ら約57万5000人(厚生労働省推計)が独裁者スターリンの指令に基づき、シベリアなどの旧ソ連やモンゴルに抑留され、インフラ整備や森林伐採に従事させられた。大部分が1950年代半ばまでに帰国したが、重労働や飢え、極寒のため計約5万5000人が死亡。91年のゴルバチョフ・ソ連大統領(当時)来日後、抑留者名簿などの記録提供が始まった。これまでに遺骨約1万7800柱が収容された。(共同)

拉致被害者情報

北朝鮮 初回報告、日

北朝鮮が9月中旬、日本人拉致被害者らの再調査に関し、拉致の疑いが拭えない特定失踪者と、残留日本人、日本人配偶者の安否情報に限って初回報告に盛り込む考えを日本側に示していたことが分かった。日本政府認定の拉致被害者12人については「調査中」として具体的な情報は提示しなかった。日朝関係筋が20日、明らかにした。日本側に関する新たな情報が含まれない限り受け入れるとしており、ないとして

関連

日本政府が経済的なするため、情にする駆けを強めた



広島土砂災害から1カ月 74人が亡くなった広島市の土砂災害は20日、発生から1カ月を迎えた。土砂災害現場では、亡くなった冨永美奈子さんの冥福を祈る友人の上本奈々恵さん(左)らが「天国でも美奈子らしく笑っていてね」と手を合わせた ＝20日午前、広島市安佐南区、関連記事31面へ

景気回復で内定辞退

学生引き留め企業苦心

県内、対話・体験でフォロー



※各月1日時点、リクルートキャリア調べ

2015年春卒業予定の採用内定者のつなぎ留めに企業が頭を悩ませている。10月1日の採用内定式を前に、複数内定を得た学生の「駆け込み辞退」が相次いでいるためだ。数年前までの就職超氷河期から状況が一変し、景気回復に伴う人手不足で売り手市場が復活。本命企業の秋募集に向け、就職活動を続ける内定者もいることから、企業は内定後のフォローや魅力のアピールに力を入れている。在学中の学生とコミュニケーション強化に取り組むのが、住宅メーカーの百年住宅(静岡市駿河区)。社内報や顧客向けの情報を送って感想を寄せてもらったり、住宅イベントの出展ブースを見学してもらったりするなど、双方向の交流を心掛ける。

ホテルや飲食店を運営するサゴーエンタプライズ(浜松市中区)は就職や働く不安の払拭(ふっしょく)に努める。学生の仕事に関する相談に乗ったり、ホテルに宿泊してもらって雰囲気を体験してもらったケースもあった。

内定者をホテルに缶詰めにしたバブル期のような過激な拘束は影を潜めたが、懇親会名目で頻繁に呼び出すなど、他社への目移りを防ぎたい企業は必死。県内でも社内バーベキューや経営者との食事会の招待、学生のアルバイト参加など企業の取り組みはさまざまだ。

県内の大学や経済団体でつくる「しずおか産学就職連

〈メモ〉
就職情報サイトを運営するリクルートキャリアの調査では、8月1日時点の内定率は78・2%と前年を6・2ポイント上回った。学生1人当たりの内定社数は1・97社。複数内定者の増加を受けて辞退率も52・0%と6・8ポイント上昇した。担当者によると、優秀な学生に多くの内定が集中しているという。

交通安全運動実施中!
知らせよう 早めのライト あなたから
交通安全年間スローガン 優秀作
夕暮れ時「午後4時にライトオン」
静岡県交通安全協会
協賛 JA共済

きょうの紙面
G20各
将 秋 巨

アベ
中村
仁川アジ
日の20日、
ロ級の中
(三井住友
連覇を達成
の日本の金
号となった
の山岸絵美
住友海上)
級の高上智
化成)が銀
の志々目徹
寺学園職

シベリア抑留2世 輪広げ

富士 慰霊祭

継承活動で初参列増

伝言 しずおか 戦後80年

第2次世界大戦後に旧満州（中国東北部）などに残された旧日本兵らが旧ソ連に連行されて過酷な労働を強いられた「シベリア抑留」を後世に伝える全国強制抑留者協会県支部は8日、酷寒の地で命を落とした犠牲者を悼む本年度の慰霊祭を富士市中島の慰霊碑「平和の礎」前で行った。戦後80年の今年は、抑留体験者2世の活動で関心の輪が広がり、初めての参列者が増加。平和を語る懇親会も6年ぶりに復活した。



献花する参列者＝8日午前、富士市の県抑留犠牲者慰霊碑「平和の礎」

終戦2カ月前に樺太の塔路町で生まれ、間もなく北海道に引き揚げた高橋美江子さん（80）＝同市＝は初めて会場に足を運んだ。「少しでも遅れていたら家族や自身も抑留された可能性があったためシベリア抑留はずっと気になっていたが、父の戦病死もあり、つらい経験は胸にしまって生きてきたという。2世で同支部事務局の望月文恵さん（71）＝同市＝に声をかけられ、気持ちが動いた。体験者が次々と鬼籍に入り、記憶継承が難しくなる現状に危機感を強め「私も語らなければいけないと思いを改めた」と目を潤ませた。

今夏に同市ロゼシアターで開かれた「平和のための富士戦争展」で、望月さんと妹太田洋子さん（69）が父の故望月寅雄さんの抑留体験をパネルで紹介したことをきっかけに、抑留の歴史に理解を深めたという一般市民の参列もあった。

静岡市葵区の窪田由佳子さん（70）が父の故一郎さんの抑留体験を記した著書を読んで来訪したのは、同区の保崎光代さん（76）と同市清水区の田引千賀江さん（67）。「こうした草の根の活動を節目の年だけでなく毎年続けることが大切」「後世に残す重みを感じた」とそれぞれ語った。

参列者減少や新型コロナ禍で途絶えていた懇親会も行った。同協会の吉田一則事務局長（77）が抑留の実態解明に向け、ロシア周辺国の公文書館と交渉する動きを紹介したほか、参列者が親族の抑留体験などを通して平和の大切さを語り合った。伯父が抑留中に命を落としたという田中忠夫さん（70）＝焼津市＝と好広さん（64）＝藤枝市＝は兄弟で参加し「慰霊のため現地を訪れてみたい」と口をそろえた。

式典や懇親会には21人が参加した。文恵さんは「例年以上にさまざまな人に20回目の慰霊祭に集まってもらえた」と感謝を述べ、継続へ決意を新たにした。

（教育文化部・鈴木美晴）

三重県鳥羽市の鳥羽水族館を訪れ、ラッコを視察される天皇、皇后両陛下＝8日午後（代表撮影）

市町の情報共有について「スピードアップしていく必要があると今日の視察で

復旧状況などを聞き取る牧野京夫防災庁設置準備担当相（中央）＝8日午前、吉田町神戸

し

全

さん、川口晴美さん、水沢なおさん、小説家の星野智幸さん、ラッパーの環ROY（たまき）



J・ワトソ

DNA二重

【ワシントン共同】生物の設計図が書き込まれたDNAの二重らせん構造を発見し、ノーベル生理学・医学賞を受賞した米国の分子生物学者ジェームズ・ワトソン博士が6日、東部ニューヨーク州のホスピスで死去した。97歳だった。ニューヨーク・タイムズ紙が7日報じた。病院で感染症の治療を受けた後、今週ホスピスに移送されていた。

英国でフランシス・クリ

絶望の凍土

太平洋戦争 最後の証言

〈5〉

揺らぐ兵 ソ連が洗脳

殺気立つ人垣の輪に一人の男が放り込まれた。おびえた目で周囲を見上げ、足をガタガタと震わせている。軍服姿の五十人の視線が男に迫る。「おまえのようなやつが、労働者・農民の祖国ソ連の発展を妨げるのだ」。口火が切られた。

一九四七（昭和二十二）年夏、沼津市の四九〇部隊一等兵、杉本源作（六七）は東シベリアのハバロフスクの収容所にいた。「つるし上げをやるぞ」。道路工事作業から帰ると、若い兵士が皆を中庭に集める。

大会が開かれた。

足にけがをして、ノルマを達成しなかった者が標的になっていた。「サボりたいのか」「反動的だ」「日本へ帰すな」。うつむく男に、攻撃は一時間も続く。かばえば、自分が標的になる。杉本も「同感、同感」とこぶしを上げ続けた。

シベリア抑留から一～二年がすぎると、収容所のあちこちでこうしたつるし上げや批判が千五百円もするのだ」と資本主義の害を吹聴する。帝国主義は発展すると領土拡張の野望を起こす。そのなれの果てが日本だと。

「だんだんソ連の話がまともに思え、頭がおかしくなってくる感じだった」。静岡市清水区の二等兵、鈴木修治（六）は思い出す。

知識を身に付けた兵隊たちは、食堂で将校と対決した。「働かずに飯を食うのか」。軍では絶対服従だった兵隊が牙をむいている。将校は青ざめた。

「民主化運動に協力すれば、帰国が早まる」とうわさされた。実際に帰国はアクチブらが優先され、参加希望者が激増した。「早く帰りたい、楽をしたいという心理に、ソ連はつけ込んできた」と横井は言う。

作業班長だった杉本の元には「あいつは作業をサボっている」「部下をいじめていた」と、仲間を売りに来る兵士もいた。

自ら「軍国主義者」だという名古屋市中川区の兵長、中川民義（六）は抑留が三年を超えたころ「アクチブになりたい」と志願した。収容所をたらい回しにされ「このまま帰れないのでは」と不安が募っていた。気付けば「赤旗に頭を下げる方が得だ」と思わされていた。

（敬称略）



収容所で共産主義のスローガンを掲げる抑留者たち＝旧ソ連イルクーツク州で

連載への感想や体験談をお寄せください。
〒460 8511 （住所不要） 中日新聞社会部「絶望の凍土」取材班
・ファクス 052(201)4331・Eメール shakai@chunichi.co.jp

絶望の凍土

太平洋戦争 最後の証言

〈7〉

ダモイ 尾引く心の闇

シベリアの平原を進む貨物列車の汽笛が近づいてくる。扉のすき間からカーキ色の軍服が見えた。壁の通気口から手のひらが伸び、左右に振られる。「ダモイ（帰国）列車だ！」。線路沿いを歩いて缶詰工場に向かっていた愛知県刈谷市の四九〇部隊一等兵、安形光雄（六七）たちは、地平線に列車が消えるまで見送った。

残酷な抑留に国際的批判が高まり、ソ連は一九四六（昭和二十一）年末から、日本兵を帰国させ始めた。「スターリン万歳」と横断幕を掲げたダモイ列車が、抑留者を極東のナホトカへ運んでいく。

作業の途中に、収容所で休憩中に、ソ連兵から声が掛かる。「名前を呼ぶ者は集まれ」。何の説明もないまま、安形も汽車に乗った。

「ダモイ」ほど、抑留者を惑わし、絶望させたロシア語はない。「この作業が終われば ダモイだ」と何度もだまされてきた。ナホトカに着いても気は抜けない。「帰国したら共産党に入党せよ」とソ連は誓約書を書かせた。「思想教育が足りない」と収容所に戻される者もいた。

四七年夏、安形は引き揚げ船「信洋丸」の甲板に足を踏み入れた。抑留から一年八カ月。白衣の日本人看護師が目にまぶしい。甲板に唐傘が干してある。「これで生きられる。死なずに済んだ」。黄金に輝いていた」ようやく確信した。

船底の畳に寝転がり、和食が用意された。名古屋市南区の二等兵、加藤日吉（八）にとって四年ぶりの米の飯。「夢にまで見た。待つ家族たち。夫や息子の名を書いたのぼりや旗がはためく。

磐田市の兵長、鈴木喜一（九〇）は舞鶴から汽車で故郷に向かった。妹たちと何を話したのか、鈴木は覚えていない。「夢にまで見た家族なのに、どうしても親しみがわいてこなかった」と、日記に書いている。

舞鶴では米軍が帰国者の思想を取り調べ、ソ連軍の情報を求めた。共産主義を宣伝する「アクチブ」になっていた鈴木も五日間留め置かれた。磐田駅に着くと出迎えた数十人を前に、演説しようとした。公安当局の目が光る。先に帰国していた収容所仲間が駆け寄ってきた。「過激な言葉はやめておけ。就職にも響くぞ」

食料を奪い合い、仲間を密告し、つるし上げた抑留生活は、兵士らの体と心を、奥深く蝕んでいた。

沼津市の一等兵、杉本源作（九七）も、四年半ぶりの家族との対面に涙が出なかった。「シベリアでは誰も信じられず、ひとときも気が抜けなかった。人間的な感情がなくなっていた」という。

家に着くと母が「風呂に入れ」と勧めてくれた。服を脱いだ背中越しで、母や妹が泣き出しだした。「骨と皮しか残ってねぇ」。黒く変色した皮膚の下に、あばら骨が浮き上がる。杉本は初めて、変わり果てた自分の姿に気付いた。

（敬称略）

＝終わり

（この連載は、社会部の鈴木孝昌、栗田晃、浅井俊典が担当しました）


1949年7月、名古屋駅に着いた引き揚げ者を出迎える女性。男性は「まだ同志との話がある」と手を振り離そうとした

元抑留者への補償

1946（昭和21）年末から56年にかけ、旧ソ連やモンゴルから帰国した元抑留者47万人は「共産主義者」との偏見や差別にさらされ、強制労働に対する国の補償も進まなかった。元抑留者は79年に全国抑留者補償協議会を結成。ピーク時には8万人が参加し、訴訟などで補償を求めたが、政府は主に銀杯や旅行券といった慰労品で応じてきた。

民主党へ政権交代したことで、戦後65年の2010年6月、元抑留者に特別給付金を支給するシベリア特別措置法が成立した。対象は生存者に限られ、帰国の時期に応じて、一人25万～150万円を支給。平和祈念事業特別基金によれば、今年1月末で、約6万6700人に計186億円が支払われた。請求期限は今年3月末までとなっている。

連載への感想や体験談をお寄せください。
〒460 8511 （住所不要） 中日新聞社会部「絶望の凍土」取材班
・ファクス 052(201)4331・Eメール shakai@chunichi.co.jp